

中国新石器時代の太行山脈東側地区における 土器編年と地域間関係

久保田 慎 二

要旨 本論は、筆者が設定する中国新石器時代末期における「環太行山脈地区文化圏」の成立過程を明らかにするための一部であり、特に太行山脈東側に焦点を絞った内容である。目的は、河北省や北京市および河南省北部を中心とする太行山脈東側地区の土器編年を再検討し、その時間軸に沿って当該地区における地域間関係を明らかにしつつ、地域的特性を抽出する点にある。

結論として、土器の型式学的検討より太行山脈東側地区の新石器時代を5期11段に区分した。そして、それぞれの時期における土器の分布状況より、当該地区では次第に交流関係を複雑化させつつ、少しずつ異なる影響関係のもとで土器様式を形成したことを明らかにした。特に東北と内蒙古中南部を含む北方系、河南、山東の影響力のバランス関係が重要である一方、西からの影響は太行山脈が障壁となり、非常に限定的な交流であったとした。ただし、第V期には太行山脈西側と類似する空三足器が東側でもみられるようになり、太行山脈を挟んだ地域間にも交流ルートが確実に形成され始めたと考えた。

はじめに

本論の目的は太行山脈東側の河北省を中心に、北京市や河南省北部を含めた地域の土器編年を論じ、時期間のつながりやその土器様式の成立に影響を与えた地域間関係を明確にする点にある。その上で、最終的に太行山脈東側地区の地域的特性を明らかにする。

中国の華北地区はその中央に南北に連なる太行山脈が走り、新石器時代中期からその周辺地域間で交流が行われてきた⁽¹⁾。特に新石器時代末期になるとこれらの地域間で空三足器を中心とする共通要素が増加し、次第に一つの文化圏としてまとまる傾向にある。筆者はこれを「環太行山脈地区文化圏」と呼んでいる。本論は、その形成過程の全容を明らかにするための一部であり、特に太行山脈東側の様相に焦点を絞ったものである。

太行山脈東側は中国の地形区分でいう第3級階梯に当たり、海拔200m以下の平原が広がる。特にこれを華北平原と呼ぶが、新石器時代の当該地区には現在よりも北を流れる黄河の旧河道が存在したと考えられている。そのため、太行山脈と黄河旧河道に挟まれた地域に遺跡が多く分布し、この南北に長い地域を段宏振は「太行山脈東麓走廊」と呼んだ(段 2001b)。周辺の山東半島や東北地方、中原地区には文化的中心地が常に存在し、それらの文化はこの「太行山脈東麓走廊」を通して頻繁な接触をもった。したがって、太行山脈東側で出土する土器の様相は非常に複雑である。しかし、逆に言えば、当該地区の様相を明らかにすることで、周辺地区の地域間関係

を明らかにすることができ、さらには太行山脈周辺地区の地域間交流の一端を解き明かすことができると思われる。

以上のような背景のもと、本論では以下に論を進めていきたい。

1. 対象とする地域および資料の抽出

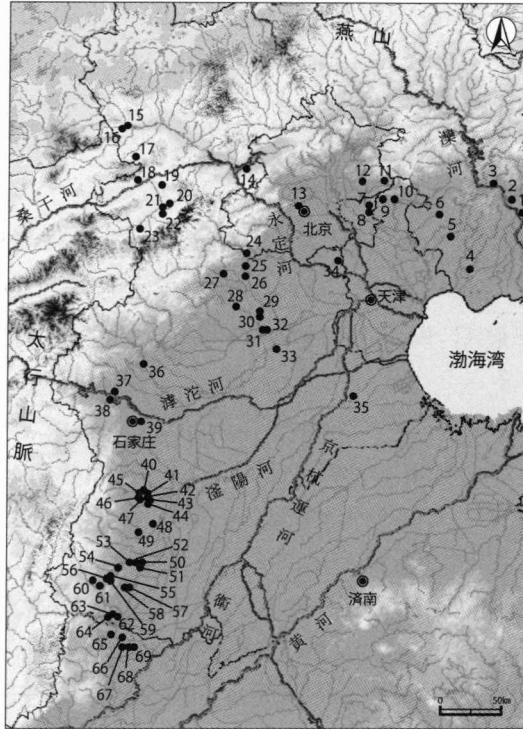
本論で対象とする地域は、既述したように太行山脈の東側、つまり現在の行政区分でいう河北省を中心に河南省北部、北京市を含む。河南省は、特に後岡一期文化や後岡二期文化の標式遺跡である後岡遺跡および大司空文化で学史的な意義のある老磨崗遺跡が所在する、河北省との省境に近い地域を対象範囲に含める。また、河北省および北京市については基本的に全地域を対象とするが、一部、以下に説明する例外を設ける。

河北省や北京市は西側の太行山脈と北側の燕山、東側の渤海に挟まれた地域からなる。これらの大半は中原の他地域の文化と密接な関係をもつ文化内容であるが、北部の燕山南麓からは異なる文化系統の土器が出土する。それらの土器は興隆洼文化など東北地方を中心に分布する文化系統に属し、中原系統の土器とは様相を異にする。したがって、これらの土器群を理解するには重心を東北地方に置いて分析を進める必要があり、本論が対象とする中原系統の土器群の分析からではその年代観などを把握することができない。このような理由から、燕山南麓の東北系の土器群を出土する遺跡は対象遺跡に含めない。ただ、同一遺跡から中原と東北の両系統の土器群が出土することがある。例えば西寨遺跡の第一期では完全に東北系統の土器が主体となるが、第二期になると碗や鉢を中心に中原系の土器が出土するようになる（河北省文物研究所ほか 1992）。同様の状況は安新莊遺跡などでもみることができる（河北省文物管理处 1984）。このような場合は、中原系の土器が出土する時期からを分析対象に含めた。これにより、少なくとも中原系土器群の東北系土器群分布地域に対する広がりなどは理解することができよう。

また対象資料については、すでに何度も示しているように土器を主に扱う。特に発掘調査が行われた遺跡で、簡報や報告書の中に図面が掲載された土器を分析対象とする。さらに、転年遺跡、東胡林遺跡、南莊頭遺跡などから出土する新石器時代前期に相当する資料は、断片的で器形も完全には分からないため、本論の対象資料からは外すことにする。以上を踏まえて、本論で扱う遺跡の分布を図1に示しておく。

2. 研究史

これまでの河北省の土器編年に関する研究は、それほど多いとは言えない。また、新石器時代全時期を通した詳細な編年も、漠然と認識されているだけで明確に提示されたことはない。その大多数が通時的な文化変化の大枠を論じるか、あるいは特定の時期に焦点を絞った編年研究のみ



1. 白蟒山遺跡 2. 安新莊遺跡 3. 西寨遺跡 4. 大城山遺跡 5. 韓家街遺跡 6. 西蒙各莊遺跡 7. 孟各莊遺跡
8. 劉白塔遺跡 9. 張家園遺跡 10. 圪坊遺跡 11. 上宅遺跡 12. 北埵頭遺跡 13. 燕園遺跡 14. 官莊遺跡 15. 西大崖遺跡
16. 宋家房遺跡 17. 水溝口遺跡 18. 姜家梁遺跡 19. 周家山遺跡 20. 莊窠遺跡 21. 四十里坡遺跡 22. 三関遺跡
23. 篩子綾羅遺跡 24. 鎮江營遺跡 25. 炭山遺跡 26. 北封村遺跡 27. 北福地遺跡 28. 南莊頭遺跡 29. 午方遺跡
30. 上坡遺跡 31. 梁莊遺跡 32. 留村遺跡 33. 唾叭莊遺跡 34. 北旺遺跡 35. 陳圩遺跡 36. 釣魚台遺跡 37. 坡底遺跡
38. 中賈壁遺跡 39. 南楊莊遺跡 40. 小里村東北遺跡 41. 西山南遺跡 42. 北小霍遺跡 43. 西侯南遺跡 44. 北村東遺跡
45. 崗沿遺跡 46. 北台遺跡 47. 沙崗地遺跡 48. 臥龍崗遺跡 49. 柴莊遺跡 50. 榆林遺跡 51. 洛関遺跡 52. 石北口遺跡
53. 台口村遺跡 54. 趙寨遺跡 55. 城二莊遺跡 56. 西万年遺跡 57. 百家村遺跡 58. 洞溝遺跡 59. 東万年遺跡 60. 牛洼堡遺跡
61. 磁山遺跡 62. 下潘汪遺跡 63. 界段營遺跡 64. 義西遺跡 65. 老磨崗遺跡 66. 後岡遺跡 67. 白營遺跡 68. 鮑家堂遺跡
69. 南崗遺跡

図1 対象遺跡の分布状況

である。

通時的な文化変化を追った代表的研究として、一連の段宏振の論考が挙げられる。まず1999年に執筆した論考の中で河北省の特に平原部の編年を、早期の南莊頭遺跡を挙げつつ、一定の地域性の存在を示しながら磁山文化、北福地文化、後岡一期文化—大司空文化、釣魚台類型、台口一期遺存、華北平原龍山文化の順に捉えた。しかし、いわゆる釣魚台類型の年代の位置付けについては明確に言及していない（文物出版社1999）。また、2001年の論考でもほぼ同様の編年観を提示し、太行山脈東麓の河北省を周辺文化の交錯地帯と位置付けた（段2001a）。2001年に発表された別の論考でもやはり同じ編年観を示したが、その中で釣魚台類型の年代を明確に後岡一期文化と大司空文化の間に位置付けた（段2001b）。

また、鄭紹宗も河北省の編年観について論じている。その中で、磁山文化、前後岡一期仰韶文

化、後岡一期仰韶文化、廟底溝仰韶文化、大司空村仰韶文化、後岡二期龍山文化という編年を提示している。これは、段宏振の年代観とほぼ同様である（鄭 1992）。

その他に喬登雲が研究史をまとめる形で、磁山文化、後岡一期文化早期、後岡一期文化晚期、廟底溝文化、大司空文化、早期龍山段階、龍山文化という編年観を示した（喬 2001）。これも段宏振や鄭紹宗と大差ない年代観であるといえる。

以上のように、現在までに示されている大まかな年代観は、各段階の呼称は異なるものの、その内容はほぼ一致している。しかしながら、これらの研究では詳細な土器の検討などがなされていないため、土器系統の連続性に基づく各時期間の関連性などは不明である。これについては、別に言及する論考がみられる。

まず、磁山文化については、1981年の簡報で仰韶文化後岡類型、つまり後岡一期文化との関係に言及している（河北省文物管理处ほか 1981）。当時はまだ北福地遺跡や鎮江營遺跡が未調査であり、両文化の中間に位置付けられる段階が設定されていなかった。しかし、簡報の中では盂、支脚、三足鉢など磁山文化特有の土器もみられるものの、鉢や壺を通して両文化間に密接なつながりが認められるとした。また、張之恒も磁山文化と後岡一期文化の関係を認めている（張 1989）。一方、梅鵬雲は磁山文化が裴李崗文化の影響を徐々に受容した後、後続する文化は明確ではないとした。そして、北福地甲類の釜や支脚をはじめとした要素には磁山文化の要素がみられないとした（梅 2002）。また、段宏振と張渭蓮は2003年から2004年に行った北福地遺跡の新たな発掘調査の成果から、磁山文化と併行する北福地一期文化と後岡一期文化に先行する北福地二期文化を設定した（段ほか 2006）。そして、その中で両文化の関係を、一期は北方、二期は東方とのつながりが強いとしてほぼ系統的なつながりは存在しないとした。このように、磁山文化と北福地文化の関係については、いまだ詳細な根拠を示しながら説得力のある見解を提示した研究はないといえよう。

次に北福地文化、つまり北福地二期と後岡一期文化の関係であるが、これについては見解が一致している。過去には後岡一期文化の分布範囲の認識に関する違いから、北辛文化を後岡一期文化の起源とする見解も存在したが（張忠培ほか 1992）、現在は後岡一期文化が北福地文化を直接継承したという見解が大部分である。段宏振は特に釜や鉢のつながりが強く、両文化は継承関係にあるとした（段 1992）。また、鎮江營遺跡の報告の中でも、北福地文化と時間的に併行する鎮江營一期文化を後岡一期文化と直接的な継承関係にあるとしている（北京市文物研究所 1999）。ただし、北福地文化と後岡一期文化の文化内容には近似した要素が多く、于孝東が鎮江營遺跡第二期に対して行った研究のように（于 2006）、両文化を明確に分ける定義付けを行う必要があろう。

釣魚台類型については、遺跡数が少ないものの、廟底溝文化との関係が指摘されている（段 1991）。在地の文化との関係はないとされ、太行山脈西側との関係の中で理解するべきである。

後岡一期文化と大司空文化の関係については、1993年に陳冰白が両文化の間に継承関係を認め、大司空文化成立に当たり廟底溝文化の影響を受容したと論じた（陳 1993）。一方、段宏振は資料

の制約があり不明な部分も多いとするが、やはり両文化の間に関連は薄いとした(段 2001a)。このように、後岡一期文化と大司空文化の関係については、いまだに見解の一致をみていない。

それでは大司空文化と龍山文化の関係についてはどうであろうか。段宏振は両文化の間におそらく継承関係があるとする。しかし、北方、中原、山東などとの関係を認め、特に中原との関係が強いとした(段 2001b)。また、1998年の論考の中では、豫北冀南地区の龍山文化の起源を台口一期遺存にあるとした(段 1998)。つまり、在地の文化を継承したということである。その他に河北省における龍山文化の起源や他文化との関係に言及した論考はほとんどみられず、研究の進展があまりみられないというのが現状である。その要因として、龍山文化の早い段階に属する遺跡がそれほど発見されていないことが挙げられる。現状の課題としては、大司空文化と龍山文化の土器を詳細に検討し、さらに龍山文化の早い段階の土器を集成し、その内容を明確にすることで、龍山文化成立に至る大きな枠組みを作る目途をつけることだろう。

以上のように、研究者間で大まかな年代観は一致するものの、詳細な文化間のつながりについては、北福地文化と後岡一期文化の関係以外は見解の一致がない状況にある。また、釣魚台類型の年代観についても、遺跡数が少なく、河北省の一時期を占めた文化に位置付け難い面もある。これらの問題を解決するために、本論では改めて土器から編年を構築し、通時的な地域文化の変遷を整理するとともに、土器の組成や型式の変化に対する検討から周辺との地域間関係を明らかにする。

3. 研究方法と作業手順

中国では一般的に土器編年を構築する際、はじめに層位と遺構間の切り合いから一遺跡内の時期を区分し、それに沿って各層位や遺構から出土した土器を並べ替える方法を採用。そのうえで、遺跡間で区分した時期間に類似性の強い型式があれば同一時期として、相対編年が組まれていく。つまり、層位学を主な方法として用い、型式学は副次的に用いられる。この方法だと、一遺跡内における時期区分に関しては、遺物の出土量に関わらず有効であるといえる。しかし、明確な土器型式を設定せずに遺跡間に共通してみられる形式を単発的に類似度の差異から比較するのみであるため、広域に及ぶ編年を組み上げる際には明確な根拠と客観性に欠ける併行関係の設定となりがちである。また、遺跡間を比較する際、一点のみの比較しかなされずに併行関係を決定することがある。土器は各形式がそれぞれ時間を異にしながら漸次的に変化するため、正確な併行関係を設定するには複数の形式を含めた一つの土器様式として全体を比較する必要がある。以上の中国における編年研究の方法論的問題を考慮しつつ、本論では以下の研究方法を採用。

まず形態や胎土、使用痕、出土状況から分かる用途や機能に基づき土器形式を決定する。そのうえで、特に細別形式ごとの型式分類を進める。分類は、土器一個体において時間的変化をよく示す属性を抽出し、その属性ごとに分類を行う。そして、属性の変化の方向を明らかにするた

め、層位関係や遺構間の切り合い、さらにはその細別形式と同じあるいは近い系統にある前後する時期の土器との比較や先学の研究成果などを通して、時間的前後関係を決定する。それをもとに、土器一個体内における各属性の組み合わせから型式を決定し、組列を組む。さらに、各細別形式における型式の一遺構内における共伴関係から土器様式を確定し、それを並べ替えることで編年を作成する。そして、土器様式や型式の変化から時期区分を行う。時期区分はすでに述べたように土器様式の変化を主な指標とする。ただし、連続する時期間の関係を明らかにする際、土器の系統性に注目する必要がある。系統は、連続する時期の継承関係を把握するための重要な指標である。中国では、既述したように遺跡単位で層位や遺構の重複、切り合い関係から時間的枠組みを構築し、その枠組みに土器を当てはめる手法が一般的である。したがって、個々の形式の抽出や系統性が曖昧になり、厳密に把握されない。その結果、前後に連続する時期、つまり土器様式間のつながりが不明確になる。土器様式が変化しても、その中のいくつかの細別形式が連続する現象は多々見受けられる。それが多ければ両時期間のつながりが強いと判断できるし、連続する細別形式がなく、根本的に土器様式が変化するならば、両時期間に関係はみいだせない。このように土器様式間の関係を考えることで、土器の背景にある両時期間のヒトの関係にまで考察を及ぼすことができよう。

次に、区分した時期ごとに土器様式の空間分布をみることで地域性を抽出し、その変遷から空間的な交流の変化を読み取る。ある一定の土器様式を共有する範囲に、異なる土器様式に含まれる形式がみられればそれは他地域との交流を示すこととなる。ただ、その場合にも交流の継続性の有無などの違いがある。その違いは、別系統の形式が連続して一定量出土するかどうかを定量的に把握することで理解できよう。また、別系統の形式がどの地域に属するのかなどの点にも注意する必要がある。それによりある地域が他のどの地域との結びつきを強めたのかが分かる。さらに、土器が単体で入っているのか、それともセット関係を持って入っているのか、セット関係をもつならば、どのような土器がセットになっているのかという点にも注意する。それにより、交流の背景にまである程度は言及することができよう。

以上の手順を経て、太行山脈東側における土器編年と交流関係を整理する。なお、本論で使用する用語の定義などに関しては、以前触れたことがあるので、ここでは詳述しない（久保田 2008）。

4. 土器編年の構築

（1）分類基準

太行山脈東側にみられる土器の中で、大別形式の煮沸器として盂、深腹罐、釜、鼎、鼓腹罐、甗、鬲、甗が挙げられる。さらに、直接煮炊きをする器ではないが、ここでは盂や釜とセットで使用される支脚もその中に含める。また貯蔵器には壺、缸、瓮、供膳器には盆、鉢、碗、豆が該当する。さらに一定の出土数があり細分可能なものについて、形態などの差異から細別形式に分

類した。以下に細別形式ごとの分類基準について説明するが、形式数が多数にのぼるため、ここでは煮沸器を中心とする主要なものに留める。言及しない細別形式については、図2を参考としてほしい。

盂は口径と器高の比率を主な基準として、Ⅰ－Ⅳに分ける。盂Ⅰは口縁部、色調、文様から分類した。口縁部はやや内傾した胴部から明確に屈曲するa、次第に胴部が直線的になり屈曲が緩くなるbやc、さらに直立するd、やや内湾気味になるeに分ける。色調は灰褐色、褐色、紅褐色に分ける。文様は縄文、篋文、無文に分ける。これらのうちの時間軸の早晚を明らかにするため磁山遺跡の簡報をみると、第一文化層には灰褐色、縄文、篋文、第二文化層には紅褐色、無文がそれぞれ多いとしている。口縁部も外反するものから直立するものへ中心が移るとしている（河北省文物管理处ほか1981）。したがって、それぞれの属性もそのような変化に則って前後関係を決めることができる。盂Ⅲも口縁部、文様、色調から分類を行う。口縁部は、やや外傾したa・bから肥厚するc、内湾するdに分かれる。文様はaを縄文、bを無文、c・d・eはそれぞれ付加堆文系、f・g・hは圧印文とする。また、色調は紅色、紅褐色、褐色、灰褐色、黒灰色、黄褐色、黒褐色、灰色に分ける。口縁部については、磁山遺跡の第一文化層でa・bが多く出土し、第2文化層でcがみられることから、a・bからcへという変化が想定できる。また、dは磁山遺跡ではみられず、北福地遺跡や上坡遺跡で出土する。したがって、地域性である可能性が高い。また、文様は縄文や無文が磁山遺跡第一文化層に多く、付加堆文系は第二文化層に多い。圧印文はやはり北福地遺跡や上坡遺跡でみることができる。盂Ⅳも口縁部、文様、色調から分類する。口縁部は直立するaから次第に外傾するc、やや内湾して口唇部上面が平坦なdに分かれる。文様は、aの無文、b－fの圧印文に分ける。色調は基本的に盂Ⅲと同様であるが、黄褐色はみられない。磁山遺跡では第一文化層から口縁部a、第二文化層からbやcが出土する。また、dについては北福地遺跡でみられる。色調では、第一文化層から褐色、第二文化層から紅色や紅褐色が出土するため、前者から後者への変化が想定できる。その他の色の出土に明確な規則性はみられない。文様については、磁山遺跡では無文が大部分を占めるが、上坡遺跡や北福地遺跡では圧印文が多く出土する。

支脚はⅠ－Ⅵに分かれる。しかし、Ⅰは4点のみ、Ⅳ－Ⅵはほぼ石北口遺跡で1点ずつしか出土しないため、ここでは詳述しない。支脚Ⅱは縦断面の形状からさらに細分し、上部先端が尖るものをA、そうではないものをBとする。支脚ⅡAは横断面と文様から分類する。横断面は中実、中空に加え、中空のものに横から穿孔したものがある。文様は、単純に文様があるものとなしものに分ける。磁山遺跡の簡報では、第一文化層から中空、第二文化層から中実の支脚が多く出土するため、前者から後者への変化があったと考えられる。支脚ⅡBは縦断面、上面の平面形、文様から分ける。縦断面は先端が広く面をもつa、やや狭くなるb、角が落ちてやや丸みをもつcに分かれる。上面の平面形はaからcにかけて丸みをもった楔形が次第に細くなる。文様は無文と有文に分ける。この支脚ⅡBは最も明確に時期的な変化を示す遺物である⁽²⁾。特に上面

	a	b	c	d	e	f	g	h
釜 I C								
釜 II A								
釜 II B								
鼎 I II								
鼓腹罐 II								
鼓腹罐 III								
鼓腹罐 IV								
鼓腹罐 V								
鼓腹罐 VI								
鼓腹罐 VII								
鼓腹罐 VIII								
鼓腹罐 IX								
甗 I								
甗 II								
甗 III A								
甗 III B								

	a	b	c	d	e	f
釜 I C						
釜 II A						
釜 II B						
鼎 I II						
鼓腹罐 II						
鼓腹罐 III						
鼓腹罐 IV						
鼓腹罐 V						
鼓腹罐 VI						
鼓腹罐 VII						
鼓腹罐 VIII						
鼓腹罐 IX						
甗 I						
甗 II						
甗 III A						
甗 III B						

図2-1 属性分類一覧①

の平面形は磁山遺跡の第一文化層からa, 第二文化層からcが出土し, 明確な変化を辿れる。しかし, 北福地遺跡では縦断面のcが多く出土するなど, 時期差ではなく地域差と考えられる要素もみられる。支脚Ⅲは完形の例が少ないため, 横断面のみから分類する。Aは上面が丸みをもつもの, bは平坦なものとする。

深腹罐はⅠ-Ⅳに分けられる。深腹罐Ⅰは器高25cm以上をA, 25cm未満をBとする。深腹罐ⅠAは口縁部, 胴部, 文様から分類する。口縁部はやや内湾し口唇部に面をもつa, 外傾するb, aに近いが口唇部に面がないcに分ける。胴部は最大径が中位にあり直線的に口縁部へと立ち上がるa, 最大径が上位にあり傾きが強いbに分ける。文様は縄文, 器表面を削った痕跡を残す刮圧, 無文に分ける。磁山遺跡では口縁部aやb, 胴部a, 縄文が出土する一方で, 時期的に大きく遅れる孟各荘遺跡後岡一期文化段階で口縁部b, 胴部b, 刮圧, さらに遅れる鎮江営文化第三期で口縁部c, 胴部b, 無文が出土するため, それぞれこのような方向で変化したことが分かる。深腹罐ⅠBは磁山遺跡における3点のみの出土であるため, 一型式とする。深腹罐Ⅱは, 口縁部と胴部から分類する。口縁部は緩やかに外湾するaからやや傾きが強くなるb, 明確に屈曲するようになるcに分かれる。胴部はaからcにかけて, 次第に最大径が下位から上位へと上がる。磁山遺跡の第一文化層では口縁部a, 第二文化層ではbが出土するため, aからb, そしてcという方向で変化すると推測できる。深腹罐Ⅳは口縁部と胴部から分ける。口縁部は内傾する胴部から緩やかに外反するa, 胴部が直線的に立ち上がり狭い口縁部が緩く外反するb, aに似るが口縁部の幅が狭いcに分ける。胴部は明確に屈曲して最大径が上位にあるa, 中位にあるb, 屈曲がなくなり緩やかにカーブするcがある。深腹罐Ⅳは一遺跡から複数が出土する例がないため, それぞれの要素の前後関係を把握しにくい。したがって, 他の細別形式との共伴関係の中で時間軸に位置付ける。

釜は4形式に分類する。釜Ⅰは丸底を呈し, 口径と器高の比率を基準に深いものからA, B, Cの3類に細分できる。それぞれ口縁部から分類を行う。釜ⅠAは口縁部内外ともに「く」字状に屈曲するa, aよりも丸みをもって屈曲するb, 内面は「く」字状に屈曲するが外面はやや丸みをもつc, 広い口縁部が緩い「S」字状を呈するdに分かれる。釜ⅠBは幅広の口縁部が外反するaから次第に幅が狭いb・cやdに至る。eは丸く内湾し, fは胴部から緩く外湾してやや肥厚するものとする。鎮江営遺跡の報告では層位関係と遺構間の切り合いから, bを出土するH479がdを出土するH517より早いことが示されている(北京市文物研究所 1999)。また, 同報告では本分類のaからdへの口縁部の変化が指摘されている。したがって, aからdへの変化を認めてよからう。釜ⅠCのaからdは, ⅠBのa・b・c・eにそれぞれ対応して分けた。釜Ⅱはやや底部が尖る形態で, やはり口径と器高の比率から深いAと浅いBに二分した。釜ⅡAは明確に屈曲するa, 屈曲が弱いb, 口縁部の幅が小さくなるcに分かれる。また, 釜ⅡBも明確に屈曲する幅広のaから次第に幅が狭くなるeがみられる。釜ⅡのAとBは釜Ⅰと同様に, 幅広の口縁部から次第に狭くなるような変化の方向を想定できるだろう。釜ⅢとⅣについてはそれぞれ一型式とする。な

お、釜Ⅳは平底を呈する。

鼎は6形式に分類することができるが、Ⅲ－Ⅵは出土数が少ないため一型式とし、ここではⅠとⅡについて説明する。なお、両形式ともに同様の型式変化の方向を示すので、ここでは一括して分類する。鼎Ⅰは釜Ⅰと同じように口径と器高の比率より、深いものからA・B・Cの3類に分ける。また、鼎Ⅱも口径と器高の比率からAとBに分ける。これらの分類は口縁部と底部の形態から行う。口縁部は緩く屈曲しながら立ち上がるaから屈曲が強いb・c、緩い「S」字状を呈するd、内湾するe、幅が狭く上端に面ができるfに分かれる。底部は丸底をa、平底をbとする。鼎は基本的に釜と同様の変化を辿るため、口縁の幅が広いaから狭いfへという変化を想定できる。また、南楊荘遺跡T69第3層から丸底、第2層から平底が出土する。同様に、層位を基準に設定した第2期では丸底が主体となるが、第3期では平底が急増する。したがって、丸底から平底への変化が考えられる。

鼓腹罐は10形式に分類する。なお、鼓腹罐Ⅰ・Ⅴ・Ⅵ・Ⅹは、出土数が限られるため型式レベルで分類を行わない。鼓腹罐Ⅲは口縁部、胴部、文様から分ける。口縁部は短く外反するa、やや上方に立ち上がるb、内湾するc、口唇部に面を作るd、口唇部が尖るeに分かれる。胴部は最大径が中位にあるaからやや上位に移るb、そして胴上半部がやや垂直ぎみに立ち上がり最大径が中位にあるc、同様の形態で最大径が上位に移るdの4類に分ける。文様は無文と胴部上位に弦文を施すものに分ける。鼓腹罐Ⅳも口縁部、胴部、文様から分類する。口縁部は「く」字状に屈曲するa、緩い「S」字状を呈するb、口唇部が上方に立ち上がるc、頸部から口縁部が緩く湾曲するdに分かれる。胴部は最大径が中位にあるa、上位に移るb、胴部上位で明確に屈曲するc、中位で屈曲するdがみられる。文様には彩文、弦文、無文、藍文がみられる。石北口遺跡中期や南楊荘遺跡第2期では口縁部a・b、胴部a・bなどがみられ、大司空文化とされる下潘汪遺跡仰韶文化第一類や界段営遺跡では口縁部dや胴部c・dが出土するため、口縁部と胴部ともにaからdへの変化が想定できる。鼓腹罐Ⅶも同様の属性から分類する。口縁部はaからcにかけて次第に湾曲が強くなる。胴部は上位にある最大径が明確なa、最大径が不明確になるb、胴下半部がやや締まるc、cよりも胴部が細くなるdに分かれる。文様は無文、藍文、縄文、地文の縄文の上に弦文を施すものに分ける。鼓腹罐Ⅶは明確な層位関係や遺構間の切り合いがある報告がみられないため、前後関係は他形式との共伴関係から判断する。鼓腹罐Ⅷも同様に口縁部、胴部、文様から分類する。口縁部は緩く湾曲するものとより明確に屈曲するものに分ける。胴部は最大径が中位やや上にあり緩くカーブするa、aよりも全体が細くなるb、最大径がより上方に上がるcに分ける。文様は縄文、藍文、方格文、無文とする。鼓腹罐Ⅷは多くが唾叭荘遺跡から出土し、一部は白営遺跡や後岡遺跡でもみられる。唾叭荘遺跡は王青により2期4段に区分されているが（王青 1995）、各時期と鼓腹罐Ⅷの分類がうまく相関しない。分類基準の問題も考えられるが、とりあえず他形式との共伴から前後関係をおさえることにしたい。鼓腹罐Ⅸは口縁部と胴部から分類する。口縁部は緩く湾曲するa、一度垂直に立ち上がってから短く外傾するb、bよ

りも長く垂直に立ち上がるc, 内傾するdに分かれる。胴部は、上位に明確な最大径をもつaから最大径が下がるb, 上位の最大径に加えて下位でも屈曲するようになるc, 最大径がcより明確になり胴部の傾きが強く直線的になるdに分かれる。これらはすべて唾叭荘遺跡から出土する。王青の時期区分の第2段から口縁部bや胴部aが出土し、第3・4段から口縁部c・d, 胴部c・dが出土するため、それぞれ大まかな変化の方向は分かるだろう。

その他の煮沸器として罍や鬲がみられるが、破片資料も含めて罍は18点、鬲は46点のみの出土であり、さらに細分形式レベルで分類すると一形式の点数が少なくなるため、型式分類は行わない。なお、罍は釜形のⅠ、罐形のⅡ、口縁が内傾するⅢに分ける。鬲は大型で内蒙古中南部や山西の晋中で多く出土するⅠ、全体が縦長で胴部が筒形のⅡ、縦長で頸部がしまるⅢ、口縁部が直立し口唇部をナデ消すⅣ、単把のⅤ、小型で無文のⅥに分かれる。Ⅵはさらに口縁部が弱く外反しつつ直立するAと明確な頸部をつくるBに細分できる。

次に、貯蔵器をみてみたい。

壺は8形式に分けられる。壺ⅠとⅦおよびⅧは出土数が少ないため、一型式として扱う。ここでは壺Ⅱ－Ⅶについて説明を加える。壺Ⅱは完形での出土が多くないため、口縁部のみから分類を行う。口縁部aは緩く立ち上がるもの、bはやや強く外反するものとする。壺Ⅲは把手が肩部につくAと胴部につくBに細分する。壺ⅢAは口縁部が残るものが少ないため、胴部と底部から分類する。胴部について、aは全体が縦長で最大径が中位やや下にあるもの、bはaよりも全体が丸みを帯びて最大径が中位やや上にあるもの、cはより丸く最大径が中位にあるものとする。底部は、丸みを帯びるものと平底に分ける。北福地文化併行とされる鎮江営遺跡第1期では胴部aやbが出土し、後岡一期文化に属する界段営遺跡ではcが出土するため、a・bからcへという変化が想定できる。壺ⅢBは口縁部と胴部から分類を行う。口縁部は直立するaと外湾するbに分かれる。胴部は全体が細く最大径が中位やや上にあるa、丸みを帯び最大径が中位にあるbに分ける。これもやはり鎮江営遺跡第1期からは胴部aが、後岡一期文化に属する四十里坡遺跡からはbが出土するため、aからbという方向に変化すると考えられる。壺Ⅳは口縁部と胴部から分ける。口縁部は「く」字状に屈曲するaと、aよりもやや立ち上がりが短いbに分けられる。胴部は最大径が上半部にあるa、中位にあるb、aと近いが最大径が大きくなるc、最大径が中位にあり丸みをもつdに分かれる。南楊荘遺跡第2期に相当するT32やT62の第3層では口縁部aや胴部a・b、第3期に相当するT56やT43の第2層では口縁部bや胴部dが出土するため、口縁部はaからb、胴部はaからdへの変化が想定できる。壺Ⅴも口縁部と胴部から分類する。口縁部はやや外傾するaから次第に内湾して屈曲が明確になるeに至る。胴部は下膨れで最大径が下位にあるa、最大径が中位にあるb、下半部がやや内側にカーブするc、下半部のカーブがより強くなるdに分ける。北福地文化に属する石北口遺跡で層位から早期とされるH28では口縁部a、また中期とされるH85ではb、後岡一期文化に属する趙窯遺跡ではdが出土するため、aからd・eへの変化が認められる。壺Ⅵも口縁部と胴部から分ける。口縁部は、「く」字状に屈曲するaか

	a	b	c	d	e		a	b	c	d	e	f	g	h	i
壺 IV	口縁部						口縁部								
	胴部						胴部								
壺 V	口縁部						口縁部								
	胴部						胴部								
壺 VI	口縁部						文様	無文	紅帯						
	胴部						盆 X	文様	無文	籃文	方格文	縄文			
紅 I	口縁部						口縁部								
	胴部						盆 XI	口縁部							
甕 II	口縁部						口縁部								
	文様	無文	縄文				盆 XII	口縁部							
甕 V	口縁部						口縁部								
	文様	縄文	縄文 付加堆文	籃文	籃文 付加堆文		盆 XIII	口縁部							
盆 I A	口縁部						口縁部								
	底部						盆 XIV	口縁部							
盆 I B	口縁部						口縁部								
	胴部						文様	無文	紅帯	黒帯					
盆 II	口縁部						口縁部								
	文様	無文	紅帯	弦文	彩文		鉢 III B	口縁部				刻線文			
盆 III A	口縁部						口縁部								
	文様	無文	紅帯	黒帯			鉢 III A	口縁部				彩文			
盆 III B	口縁部						口縁部								
	文様	無文	紅帯	黒帯			文様	[j]	[k]	[l]					
盆 IV	口縁部						口縁部								
	文様	無文	弦文				鉢 V A	口縁部							

図2-2 属性分類一覧②

らやや屈曲する角度が大きくなるb, 外傾が強くなるc, 口唇部の内傾が強くなり上端が溝状になるdに分ける。胴部は円形を呈し最大径が中位にあるaから次第に最大径が上がるcに至る。南楊荘遺跡では第1期に口縁部a・b, 胴部aがみられ, 第2期に口縁部b・c, 胴部b・cが出現し, 第3期には口縁部dが出土するようになる。したがって, 変化の方向もこの順序と同様であろう。

瓮は8形式に分かれる。出土数が少ない瓮Ⅰ・Ⅲ・Ⅳ・Ⅵ・Ⅶ・Ⅷは一型式とする。ここでは特に瓮Ⅴについて説明する。瓮Ⅴは口縁部と文様から分類する。口縁部は垂直に立ち上がり口唇部が肥厚するa, やや内傾するbに分かれる。文様は縄文, 縄文の上に付加堆文を施すもの, 藍文, 藍文の上に付加堆文を施すものに分かれる。これらはすべて唾叭荘遺跡や陳圩遺跡など龍山文化併行と考えられる遺跡から出土する。

ここからは供膳器について, 説明を行う。

まず, 盆の分類基準を示すが, 盆は鉢, 碗などと形態的に類似するものが多い。これら類似形式を大別する基準として, 便宜的に口径30cm以上は盆, 20cm以上30cm未満は鉢, 20cm未満は碗とする。

盆は15形式とかなり多い。ただし, これも出土数が少ないⅤ・Ⅵ・Ⅸ・Ⅻは一型式とする。ここでの説明は最小限に抑え, 盆Ⅰ-Ⅳ, Ⅷのみとする。盆Ⅰは底部から丸底のAと平底のBに分ける。盆ⅠBは口縁部, 胴部, 文様から分ける。口縁部はaからcがそれぞれ盆ⅠAと同様である。dは肩部からの内傾が強くなり短く立ち上がるものとする。胴部はaからdへ次第に最大径の位置が上がり, さらに明確に屈曲する。文様は無文, 口縁部付近の紅帯, 弦文, 紅帯以外の彩文に分かれる。南楊荘遺跡では第1期に口縁部a, 胴部a・b, 第2期以降に口縁部b・c, 胴部cが出現する。またdは石北口遺跡で彩文と相関関係があり, 後岡一期文化の晩い段階に出現すると考えられる。盆Ⅱは口縁部, 胴部, 文様から分類する。口縁部は外傾しながら立ち上がりやや肥厚するa, 口唇部で外反するb, やや内に湾曲してから外反するc, 直線的に立ち上がるdに分かれる。胴部は直線的なaから次第に外傾が強くなるb, そして中位で屈曲するcがある。文様には無文, 紅帯, 縄文がみられる。北福地文化に相当するとされる鎮江営遺跡第1期では口縁部aが多く, 後岡一期文化併行の劉白塔遺跡T2H1ではbが出現する。また大司空文化に相当する城二荘遺跡T1②ではdがみられる。文様は口縁部aに対して紅帯がよく相関し, 口縁部b, cなどには無文が相関する。盆Ⅲは, 底部から丸底のA, 平底のBに細分する。盆ⅢBは口縁部と文様から分類を行う。口縁部はaからdへと次第に屈曲が明確になるものとする。文様は無文, 紅帯, 黒帯, さらに斜弧線三角文と呼ばれる彩文がみられる。石北口遺跡早期では口縁部a, 中期と晩期ではb・cがみられる。さらに大司空文化とされる柴荘遺跡ではdの口縁部がみられる。したがって, aからdへの変化が想定できる。また, 文様も石北口遺跡中期までは無文と紅帯がみられるが, 晩期には黒帯が出現し, 柴荘遺跡では斜弧線三角文が出土する。出現の順序もこれと同様であろう。盆Ⅳは口縁部, 胴部, 文様から分類する。口縁部は, 内湾しながら口唇部が肥

厚するa, 口唇部が外反するb, 強く外へ屈曲するc・d, より強く屈曲して肥厚するようになるeに分ける。胴部は直線的なaから次第に曲線状になるcに分ける。文様は無文, 弦文, 斜弧線三角文の3つに分ける。盆Ⅷは口縁部, 胴部, 文様から分類する。口縁部は内傾しながら強く外反するa, やや内傾し「く」字状に外反するb, 直立し外反するc, 外傾しながら立ち上がり緩く外反するdに分かれる。胴部はaからdへと最大径が下がり屈曲が明確になっていく。文様は無文と紅帯の他にcの連続縦条文, dの斜弧線三角文, eの縦弧線三角文, fの網状文などの彩文がみられる。口縁部と胴部のa・bおよび無文と紅帯は, 後岡遺跡H3や界段営遺跡H50など後岡一期文化併行期で出土する。一方, 口縁部と胴部のcやd, 彩文は下潘汪遺跡仰韶文化第一期など大司空文化併行とされる遺跡から出土する。したがって変化の方向もこれに準じるだろう。また, 彩文も斜弧線三角文から縦弧線三角文への変化が指摘されているように（呉 1996）, 時間軸に沿った変化があると考えられる。

鉢は9形式に分かれる。Ⅰ・Ⅱ・Ⅸについては出土数が少ないため, Ⅵについては属性の変化が乏しいため細分しない。鉢Ⅲは底部から丸底のAと平底のBに分ける。鉢ⅢAは口縁部と文様から分類する。口縁部は傾きが強いaと直立に近いbに分ける。文様は無文, 紅帯, 黒帯に分ける。鎮江営遺跡第1期では口縁部a, 第2期ではbが出土し, 磁山文化に相当する磁山遺跡では無文, 北福地文化に相当する鎮江営遺跡第1期では紅帯, 後岡一期文化に相当する後岡遺跡では黒帯が出土するため, 口縁部はaからb, 文様は無文から紅帯, そして黒帯が出現すると考えられる。鉢ⅢBも口縁部と文様から分類する。口縁部はaからcにかけて次第に傾きが強くなる。文様はⅠAとはほぼ同様であるが, さらに刻線文もみられる。鉢Ⅳも底部から丸底のAと平底のBに分ける。鉢ⅣBは口縁部と文様から分類する。口縁部はaからeにかけてやはり次第に屈曲が明確になっていく。文様は無文, 紅帯, 黒帯に加え, dの斜弧線三角文, eの連続縦条文, fの鋸歯文, gの疊三角文, hの線が細い蝶鬚文, iの太い蝶鬚文, jの渦状文, kの波状文, lの縦条文に分かれる。石北口遺跡早期あるいは中期など北福地文化や後岡一期文化に相当する時期では口縁部aやb, 老磨崗遺跡や下潘汪遺跡仰韶文化第一類など大司空文化に相当する遺跡からはdやeが出土するため, 口縁部はaからeへと変化すると考えられる。文様は口縁部a・bと無文や紅帯, d・eと彩文が関連するため, やはり無文や紅帯から彩文が次第に増加したと考えるべきである。鉢Ⅴも底部から, 丸底のAと平底のBに分けられる。鉢ⅤBは口縁部と文様から分類する。口縁部はaから次第に内湾するcに分ける。文様は無文, 紅帯と黒帯に加え, 連続縦条文, 平行斜線三角文, 平行斜線文, 交錯平行斜線三角文, 縦条文, 平行縦線文, 紅帯縦条文, 花卉文, 人面文などがあり, さらに縄文, 刻線文もみられる。南楊荘遺跡では第1期に口縁部aが主体となるが, 第2期にはb・cが出現し, 第3期にはcが多くを占めるようになる。また, 文様は南楊荘遺跡第1期では無文と紅帯がみられ, 第2・3期にはe・f・gが出現する。さらに第4期ではk, 第5期ではlがみられるようになる。鉢Ⅷもやはり口縁部と文様から分類する。口縁部は屈曲した後に外傾しながら立ち上がるaから次第に内傾するdへと至る。文様は無文と紅帯

	a	b	c	d	e	f	g	h	i
鉢 VII	口縁部								
	文様	無文	紅帯						
鉢 VII	口縁部								
	文様	無文	紅帯						
碗 IV	口縁部								
	文様	無文	紅帯						
碗 VII	口縁部								
	口径／器高	3 以上	2.5 以上 3 未満	2.5 未満					
碗 VII	口縁部								
	色調	紅	褐	灰	黒灰				
碗 VII	口縁部								
	色調	紅	紅褐	褐	灰	灰褐			
豆 I	口縁部								
	口縁部								
豆 II	口縁部								
	脚部								
豆 IV	口縁部								
	口縁部								

図2-3 属性分類一覧③

の他に斜弧線三角文、縦弧線三角文、細線蝶鬚文、太線蝶鬚文、疊人字文、鋸歯文、方形網文などがみられる。石北口遺跡早・中期や鎮江宮遺跡第1期、劉白塔遺跡などの北福地文化から後岡一期文化に相当する遺跡からは口縁部a・b、後続する大司空文化に相当する遺跡からはc・dが多く出土する。口縁部と文様の相関関係からみると、口縁部a・bには無文と紅帯、c・dには各種の彩文が相関するため、前者の組み合わせから後者へと大きく変化したことが分かる。

碗は10形式に分かれる。ただ出土数の関係から、I - III・V・VI・IX・Xは一型式とする。碗VIIは口縁部、口径／器高の数値、色調から分類する。口縁部は、直線的に外傾するa、口唇部が外反するb、逆に内側に突出するc、面を作るd、ややカーブしながら立ち上がるeに分ける。口径／器高は3以上をa、2.5以上3未満をb、2.5未満をcとする。色調は紅色をa、褐色をb、灰色をc、黒灰色をdとする。午方遺跡では口縁部aや口径／器高a、紅色が多くみられる一方で、龍山文化併行とされる遺跡では口縁部c・d・e、口縁／器高c、灰色が多い。各属性の変化もこれに沿ったものと考えられる。

以上が本論で行った主な細別形式内における型式分類の基準である。これら各属性の組み合わせから型式を設定し、細別形式間の一遺構内における共伴関係を確認したうえで、型式の早晩や土器様式に矛盾がないよう並べ替え、図3のような土器編年を作成した。

（2）時期区分

ここでは、土器様式の変化を指標として、土器編年を区分する。すでに土器型式から時間的変化の方向が分かるので、それを基準に土器様式の変化を抽出すれば時期を区分することができるし、さらに同様式内の型式変化を追うことでさらに細分することができる。結果的に本論では河北の新石器時代を5期11段に区分した。

第Ⅰ期は前葉と後葉に細分できる。前葉では煮沸器として孟ⅠとⅢ、それを支える支脚がみられる。また深腹罐Ⅰも出土する。貯蔵器と供膳器についてはそれほど多くなく、比較的単純な土器様式であることが分かる。後葉になると、胴部が浅い孟Ⅳなども恒常的にみられるようになり、支脚もⅡBなどが増加する。また大きな変化として、貯蔵器に壺が新たに出現する。供膳器については鉢ⅠAがみられるが、これは前葉にも存在し、それを継承したものと判断できる。全体を考えると、煮沸器は孟とそれを支える支脚、深腹罐から構成される。また、貯蔵器や供膳器は少なく、壺Ⅰや鉢ⅠAがみられる程度である。第Ⅰ期を通じて、基本的な土器様式に大きな変化はなく、さらに孟ⅠやⅢ、深腹罐Ⅰ、支脚ⅡAなど恒常的に出土する形式が多く存在する。したがって、これらを一時期と捉えて問題はなかろう。この第Ⅰ期は一般的にいう磁山文化に相当する。

第Ⅱ期も前葉と後葉に分ける。前葉では釜ⅠA・B、釜ⅡA・B、さらに支脚ⅠやⅢなどが煮沸器として出土する。また、貯蔵器としては第Ⅰ期とのつながりが認められる壺Ⅰに加え、壺Ⅱ、ⅢAなどが新たに出現する。供膳器については第Ⅰ期に比べ形式数が急増する。盆Ⅱ・Ⅳ、鉢ⅠA・Ⅱ・ⅢB・ⅣA・ⅤB・Ⅵ・Ⅶなど各形式が出現する。後葉になると釜ⅠCや壺Ⅵ、盆ⅢB、鉢ⅢAなど新たな形式が出現するが、基本的な組み合わせは大きく変わらない。ただ、属性レベルの変化に注目すると、釜ⅠBの口縁部が前葉ではaやbが主要であるが後葉ではdやeが増加し、盆Ⅳでも口縁部がaやbからcやeへと変化する。このように前葉から後葉にかけては様式と型式に若干の変化がある。しかし、基本的には煮沸器に釜ⅠとⅡ、支脚Ⅲ、貯蔵器に壺Ⅰ・Ⅱ・ⅢA、供膳器に各形式の盆と鉢というセット関係は変わらない。したがって、前葉と後葉を一時期と捉えることができる。また、第Ⅰ期との関係について、土器様式は極めて明瞭に変化する。支脚など第Ⅰ期と共通する形式についても、第Ⅰ期では平底の孟をのせるために上面が平坦であったものが、第Ⅱ期では丸底の釜をのせるために平坦でないものも出現するなどの違いがある。おそらく両者には直接的な継承関係はない。このように、基本的には両時期間に明確な継承関係を認めることはできない。しかし、壺Ⅰや鉢ⅠAのように一部には関係のある形式も存在するため、部分的な連続性も合わせて考える必要があろう。

第Ⅲ期は前葉と後葉に分ける。前葉ではまだ煮沸器に第Ⅱ期でみられた釜ⅠやⅡが残るが、加えて平底の釜Ⅳが現れる。そして新たに鼎ⅠA・BやⅡA・Bが出現する。また、支脚の出土数が減少し、逆に灶がみられるようになるので、釜は灶にのせて使用されるようになったと考えられる。また、煮沸器には鼓腹罐Ⅲなども新たに出現する。貯蔵器については、やはり第Ⅱ期と同様に壺ⅢAやⅥがみられ、さらに壺ⅣやⅤも現れる。供膳器は大部分が第Ⅱ期を踏襲し、新出の細別形式としては鉢Ⅶがある程度である。後葉になると、釜の出土がなくなり、鼎ⅠとⅡおよび鼓腹罐Ⅲが主な煮沸器となる。貯蔵器については前葉と全く同様のセットである。また供膳器も盆Ⅱがみられなくなる程度で、あとの組成に大きな変化はない。一方、属性レベルでみると、前葉から後葉にかけて鼎ⅠやⅡの底部がaの丸底からbの平底に変わり、鉢ⅦBの口縁部がa・b主体からb・c主体へと変わるなど、時間軸に沿った型式変化を看取できる。全体では、前葉段階における各形式のつながりが第Ⅱ期と非常に強いことが分かる。時期を分ける最も顕著な変化は鼎の出現であるが、前葉ではまだ釜が残るため、過渡期とみなすことができる。また、この釜から鼎への変化も、釜と支脚が一体化したものを鼎と捉えれば、これは内的な変化と理解できる。鼓腹罐の出現についても、平底の釜Ⅳとの関係から理解すれば、外部からの影響というよりも内部における変化と捉えるべきである。つまり、第Ⅱ期から第Ⅲ期への移行は、主に内的な変化の中で発生したと判断できる。

第Ⅳ期は前葉、中葉、後葉の3段に細分できる。前葉では煮沸器に鼓腹罐ⅢとⅣしかみられなくなる。また、貯蔵器も高領罐が恒常的に出土する程度である。供膳器は主要なものとして盆ⅣやⅦ、鉢ⅣBやⅦがみられる。中葉の煮沸器と貯蔵器も同様で、基本的には鼓腹罐Ⅳと高領罐Ⅰが主体となる。供膳器には新たに碗Ⅶが加わる。型式レベルで前葉と比較すれば、盆Ⅶの口縁部はbからc・d中心に変化し、文様はdからeの増加が認められる。また、鉢ⅣBの口縁部はd中心からeが増加するようになる。後葉になると煮沸器の鼓腹罐Ⅳに加えて鼓腹罐Ⅶが出現する。形態から比較すると、鼓腹罐ⅦはⅣから派生した形式と考えられ、後続する時期にも継承される。一方、貯蔵器は相変わらず高領罐Ⅰが中心となる。供膳器には新たに盆ⅩやⅩⅣなど後続する時期につながる形式が出現する。その他に豆が現れる。後葉は盆Ⅶの文様でeがdに替わって主要となる点や、鉢ⅣBの文様でhに対してiが増加する点など形式レベルの変化は認められる。ただ、最大の特徴は鼓腹罐Ⅶや盆ⅩⅣなど新たな形式が出現する点にある。このようにみると、第Ⅳ期は鼓腹罐Ⅳを主要な煮沸器、高領罐Ⅰを貯蔵器とすることができ、かなり形式数が少ないことが分かる。一方、供膳器は比較的豊富で盆Ⅳ・Ⅶ、鉢ⅣB・Ⅶなどが全期間にみられ、第Ⅳ期の典型形式といえよう。第Ⅲ期との関係については、土器様式レベルでみれば大幅に形式数が減少しており、両時期の間に大きな変化を認めざるを得ない。しかし、前葉の鼓腹罐Ⅲや盆Ⅳ・Ⅶ、鉢ⅣBは明らかに第Ⅲ期と同系統にある。このように考えれば、やはり両時期間に一定の継承関係を認める必要があろう。

第Ⅴ期は前葉と後葉に分かれる。前葉の煮沸器には再び鼎が出現するほか、罎ⅠやⅢ、甗Ⅱな

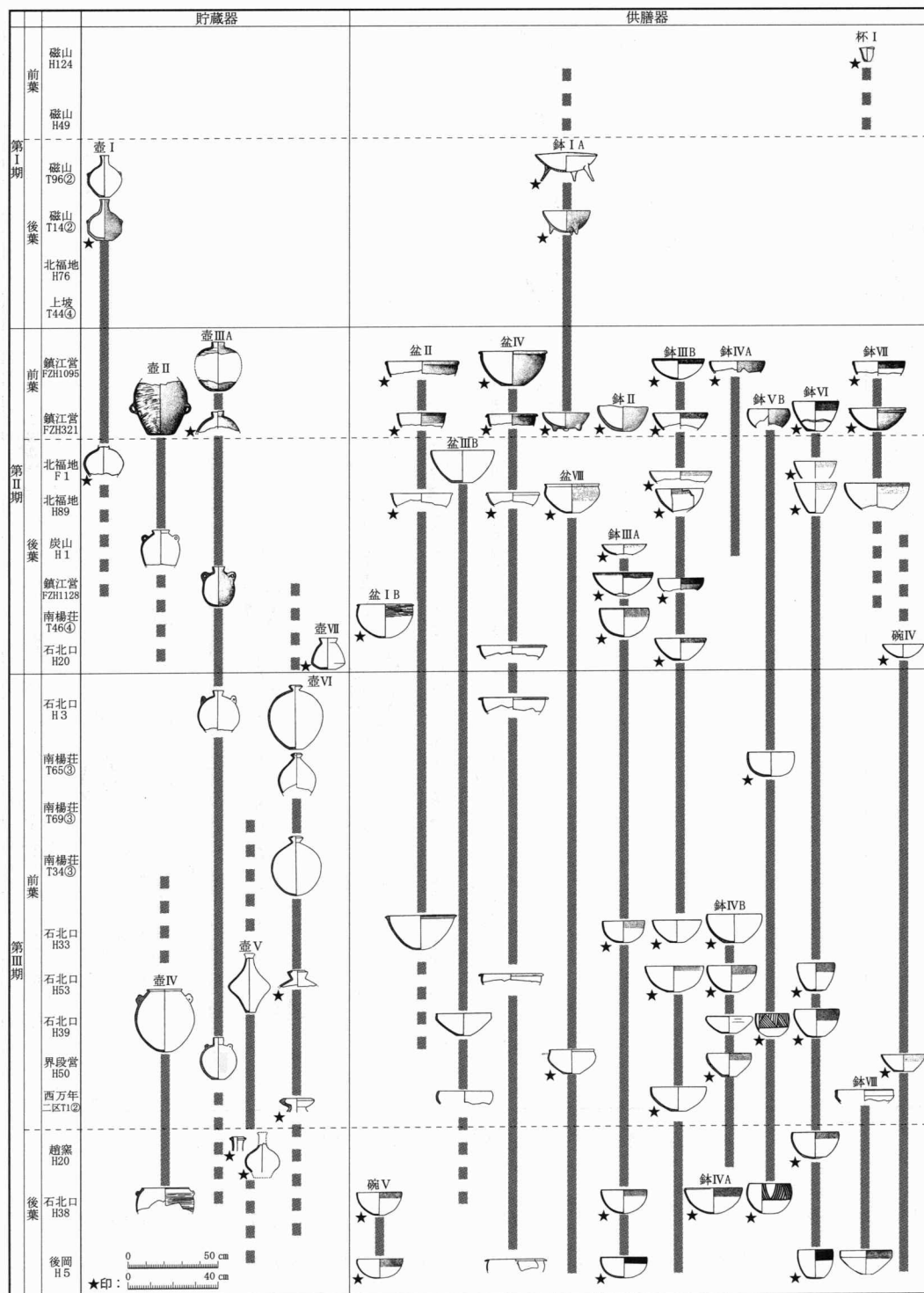


図3-2 第Ⅰ-Ⅲ期の土器編年(貯蔵器・供膳器)

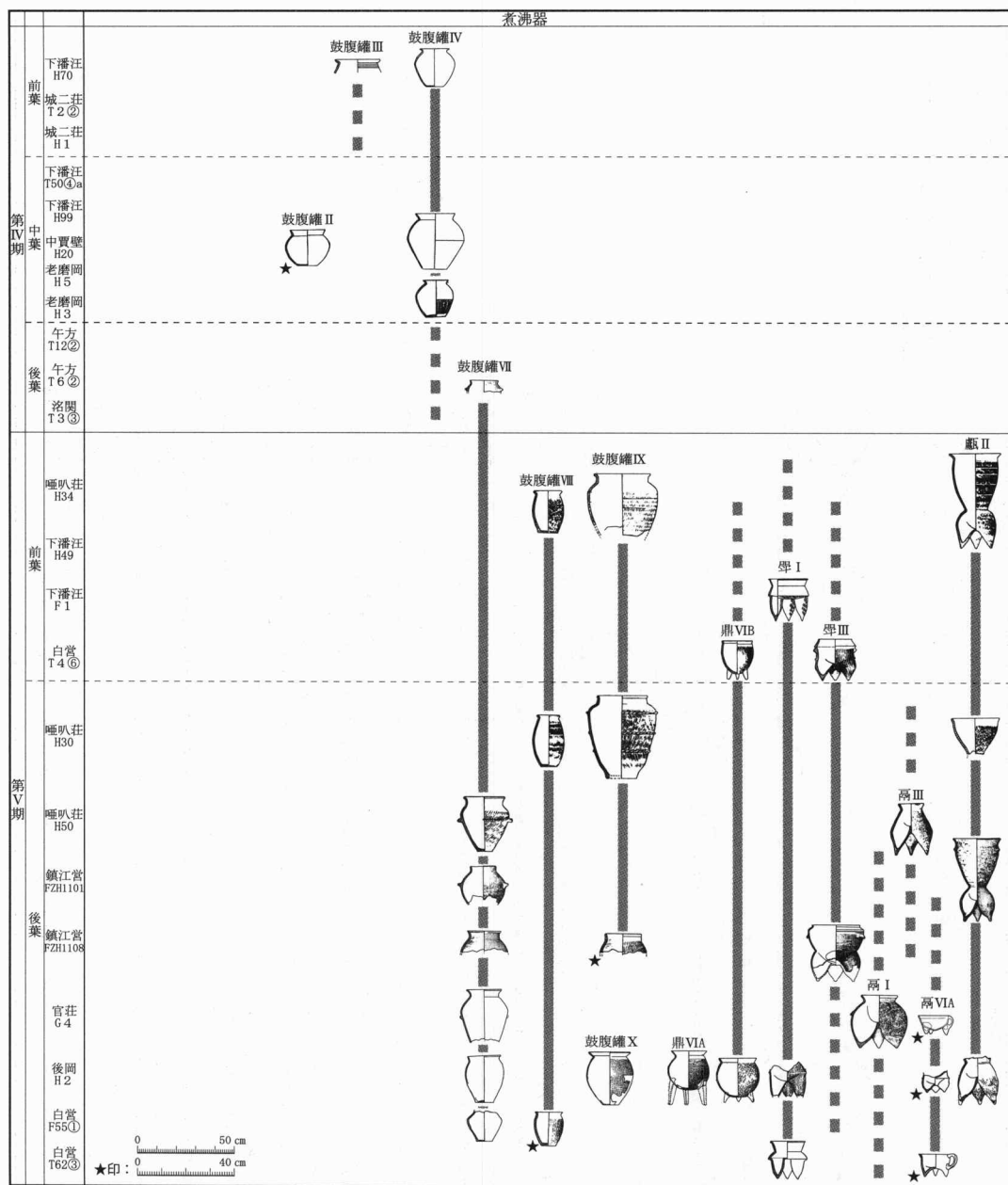


図3-3 第IV-V期の土器編年 (煮沸器)

どの空三足器が初めて現れる。その他に第IV期後葉から継承した鼓腹罐Ⅶや新出の鼓腹罐Ⅷ・Ⅸなどもみられる。貯蔵器にも高領罐はみられなくなり、缸Ⅲや瓮Ⅷが出現する。供膳器については、その大部分が第IV期から継承した形式である。盆Ⅺなどは出土数も少なく客体的な存在であり、他地域に由来する形式であろう。後葉も基本的には近似する土器様式であるが、新たに鬲

との関係が異なる状況をどのように捉えるかは非常に難しいが、少なくとも、両時期間に一定の関係性を認めるべきである。ただし、最も第Ⅳ期と関係の多い供膳器も、形態的には比較的類似するが、彩陶が急激に消失するなど急速な変化も看取できる。周辺地域では、河北の第Ⅴ期と併行する時期の前段階にすでに彩陶がみられない点や、新たな煮沸器が多く出現する点などを鑑みると、第Ⅳ期と第Ⅴ期の間には一定の時間差があったと考えてもよからう。

以上のように、各時期にはそれぞれ異なる土器様式が認められる。そして各時期内でも新たな形式の出現や型式の変化から編年を細分することができる。また、各時期間の関係も多様であることが分かる。第Ⅰ期と第Ⅱ期の間にはほとんど連続性が認められない一方で、第Ⅱ期と第Ⅲ期は極めてつながりが強い。第Ⅲ期と第Ⅳ期、第Ⅳ期と第Ⅴ期の間には煮沸器や貯蔵器に系統的なつながりは認められないが、供膳器については形式の連続性を比較的抽出しやすい。形式の連続性から単純に時期間の関係性の強弱を論じることは難しいが、少なくとも一つの指標にはできる。そう考えると、第Ⅰ期と第Ⅱ期の間には煮沸器、貯蔵器、供膳器すべてにわたる変化があるため、土器を製作・使用したヒトの根本的な交替なども想定する必要がある。反対に土器様式の変化が少ない第Ⅱ期と第Ⅲ期の間は、在地に居住し続けたヒトによる内的な変化であったといえる。第Ⅲ期と第Ⅳ期、第Ⅳ期と第Ⅴ期については、部分的な連続性が認められることから、完全なヒトの移住などによる交替現象を想定することは難しい。筆者はこれを土器の製作・使用は在地の居住者が担ったが、それらのヒトが外部の土器に関する情報を受容したことで部分的に新たな形式を創出あるいは導入し、土器様式が変化したと考えたい。当然、その前提として、情報を受容した土器自体に一定の機能的優越性や価値があったと考える。また、第Ⅳ期と第Ⅴ期の間には空白期間があろうが、それでも供膳器の系統が共通するのは、土器製作の地域的特徴である「範型」のようなものが遺跡のみられない期間も残存したことを示すのだろう。

なお、図4に各遺跡の存続期間を示しておく。特に第Ⅰ期後葉と第Ⅱ期前葉、第Ⅲ期後葉と第Ⅳ期前葉それぞれを通して確実に存続する遺跡は見当たらず、一方で第Ⅱ期後葉と第Ⅲ期前葉の間にはいくつか連続して存続する遺跡がみられる。このような状況は各時期における土器様式のつながりとリンクしており、非常に興味深い現象である。

（3）「釣魚台類型」の編年上の位置付け

ここまで太行山脈東側における新石器時代の土器編年の構築を進めてきたが、この中に一部含まれていない資料がある。それらは研究史上で「釣魚台類型」と呼ばれる土器群である。すでに研究史で示したように、「釣魚台類型」はいわゆる後岡一期文化と大司空文化の間に位置付けられ、編年上で両文化とは併行しない一定の時間幅を与えられている。

釣魚台類型は図5に示すような内容から判断すると、花卉文の彩陶を特徴とする廟底溝文化の一地方類型に位置付けることができ、土器の形態や文様から特にその中・後期段階であると考えられる。本論の対象地域の中で釣魚台類型の土器を出土する遺跡は宋家房遺跡、三関遺跡、釣魚

遺跡	時期	I		II		III		IV			V	
		前葉	後葉	前葉	後葉	前葉	後葉	前葉	中葉	後葉	前葉	後葉
磁山		H49	T96②									
牛洼堡			H4									
北福地			H76		H89					T211①		
上坡			T44④							T31③		
北旺												
梁莊							T2②					
北地頭												
鎮江營				FZH321	FZH1128	FZH1390				FZH1038		FZH1108
白蟒山												
炭山					H1							
劉白塔					T2H1							
留村					T1②							
北村東												
西侯南												
西寨							T31②					
南楊莊					T46④	T69③	T13②		T21③			
石北口					H20	H3	H38					
安新莊					T3②							
北台												
界段營							H50		H35			
西万年二區							T1②					
義西							H11			H16		
臥龍岡							H1					H2
下潘莊							Y1		H99	H70	F1	
小里村東北												
沙崗地												
上宅							T0408④					
孟各莊							T12②					
趙寨												
四十里坡												
西山南												
後岡												
莊寨											H45	H2
南莊頭												H106
柴莊												
台口村												
城二莊											T24②	
中賈壁												
鮑家堂								H1				
百家村								H18	H20			
燕園									H1			
周家山												
姜家梁									M75	M15		
老廟崗									H5	H3		
大寨南岡									H1	F1		T1
洛崗												
午方												
東万年												
西蒙各莊												
張家園												
坡底												
饒子綾羅												
園坊												
潤溝												
嘩叭莊												
白營												
宋家房												
崗沿												
北小翟東南												
水溝口												
韓家街												
官莊												H1
北封村												H6
陳圩												T11②
榆林												H1
大城山												溝8②
西大崖												

図4 対象遺跡の所属年代

台遺跡、南楊荘遺跡の4遺跡しか確認することができない。釣魚台類型に先行するとされる本論の第Ⅲ期では少なくとも26遺跡、後続する第Ⅳ期にも26遺跡がみられる。この第Ⅲ期と第Ⅳ期の間に釣魚台類型を入れると、遺跡数に極めて急激な増減があったことになる。筆者はこれを非常に不自然な現象であるとする。

遺跡の分布をみても、宋家房遺跡と三関遺跡は河北北部の黄土高原、桑干河の支流沿いに位置する。また、釣魚台遺跡と南楊荘遺跡は河北中部の滏陽河支流近くに位置する。このように各遺跡は河北省の中・北部に片寄り、南部にはみられない。南部にも第Ⅲ期の遺跡が存在する

ことを考えると、やはりみつかっていない釣魚台類型に対して後続する一定の時間幅を与えることに疑問が残る。

また、南楊荘遺跡では第4期に釣魚台類型と同様の土器群を位置付けており、第3期には本論の第Ⅲ期、第5期には本論の第Ⅳ期が相当している（河北省文物研究所 2003）。しかし、報告書をみても第3期や第5期と第4期の遺物に層位的な関係はなく、時期をどのように決定したのかも不明確である。さらに第4期の釣魚台類型に属する遺物が出土したT72③からは第5期の遺物も出土しており、報告そのものに疑問を抱かざるを得ない。

以上の根拠から、むしろ筆者は、釣魚台類型を第Ⅳ期に併行させるのが適当と考える。釣魚台類型の土器を出土する4遺跡はいずれも太行山脈から流れ出る河川近くに位置しており、比較的典型的な廟底溝文化が山西省中部や内蒙古自治区中南部でも出土することを考えると、これらの河川を一つのルートとして太行山脈の西側や北側から入り込んだと考えることもできる。太行山脈東側には山脈を抜けるための「太行八径」と呼ばれるルートがあったといわれる（《中国国家地理地図》編委会 2010）。これらは太行山脈の南北にそれぞれみられ、軍事的・経済的な面から重要視され、河北と山西をつなぐ要衝であったとされる。また、『山西省歴史地図集』では、古典籍を参考に先秦から清までの山西省と他地域を繋ぐルートについて示している（山西省歴史地図集編纂委員会 2000）。特に先秦や秦漢、魏晉南北朝までのルートをみると、大まかに河川に沿って4－6ルートほどが想定されている。図6はその一部を示したもののだが、釣魚台類型の土器を出土する遺跡は軍都径や飛狐径、井径に近く、それらを通して太行山脈の西側や北側と交流を行ったと考えられる。

太行山脈西側の山西をみると、本論第Ⅳ期のいわゆる大司空文化系統の彩陶が出土している。例えば晋中盆地をさらに越えた呂梁山脈地区に位置する馬茂荘遺跡では図7のような鉢が採集さ

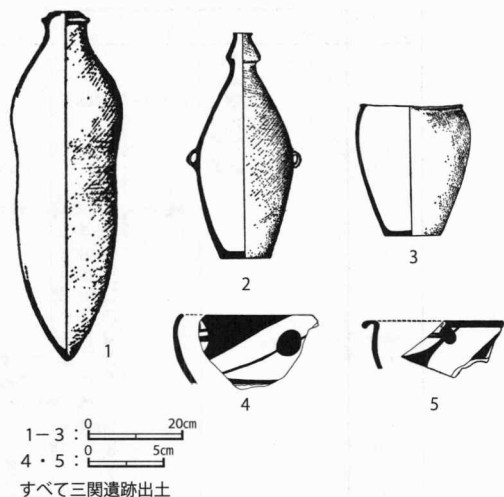
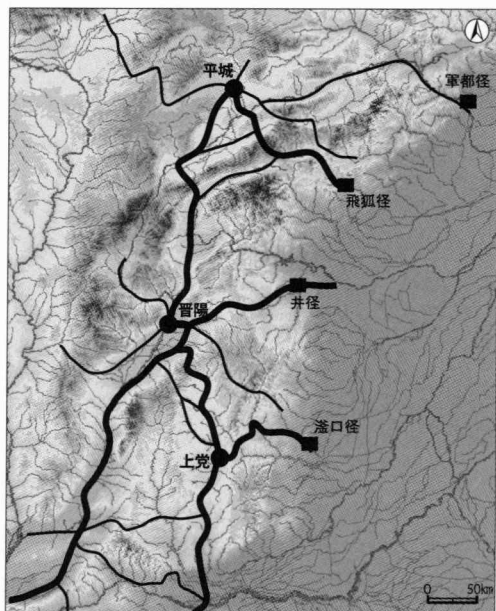


図5 釣魚台類型の土器



(山西省歴史地理図集編纂委員会 2000、後藤 2009、
《中国国家地理地図》編委会 2010 より作成)

図6 太行山脈東西をつなぐルート

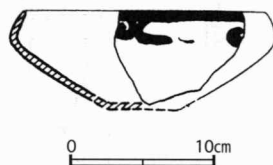


図7 馬茂莊遺跡出土の鉞

れている。つまり、太行山脈東西には既述したルートなどを通した相互交流があったと想定できる。また、図7の鉞は、本論の鉞IVB、口縁部d、文様iに相当し、大体第IV期中葉から後葉に位置付けられる。この鉞は報告の中で離石・柳林地区の第3期に位置付けられ、その前段階の第2期には釣魚台類型と同じ型式の土器をもつ廟底溝文化が当てはめられている(国家文物局ほか1999)。つまり、離石・柳林地区第3期に本論の第IV期中葉あるいは後葉が相当すると考えると、第2期は本論の第IV期前葉以前ということになる。このように考えると、釣魚台類型を本論の第IV期前葉に併行する時期に置いても矛盾はせず、むしろ遺跡数や分布の問題を合わせて考えれば、妥当な年代観と考えることができよう。

5. 地域間における交流関係

次に、ここまで構築した土器編年に基づいて、各時期における地域間関係について確認し、その変遷を明らかにする。以下、図8に沿って、時期ごとに分けて記述する。

(1) 各時期における交流関係

i) 第I期

第I期は6遺跡しか報告されていない。出土遺物が少ない梁莊遺跡を除けば、河北南部に磁山遺跡と牛洼堡遺跡、中部に北福地遺跡、上坡遺跡、北旺遺跡が位置する。中部の3遺跡ではそれぞれ盃と支脚のみしか出土しない。盃については平底という特徴から東北の筒形罐との関係が想

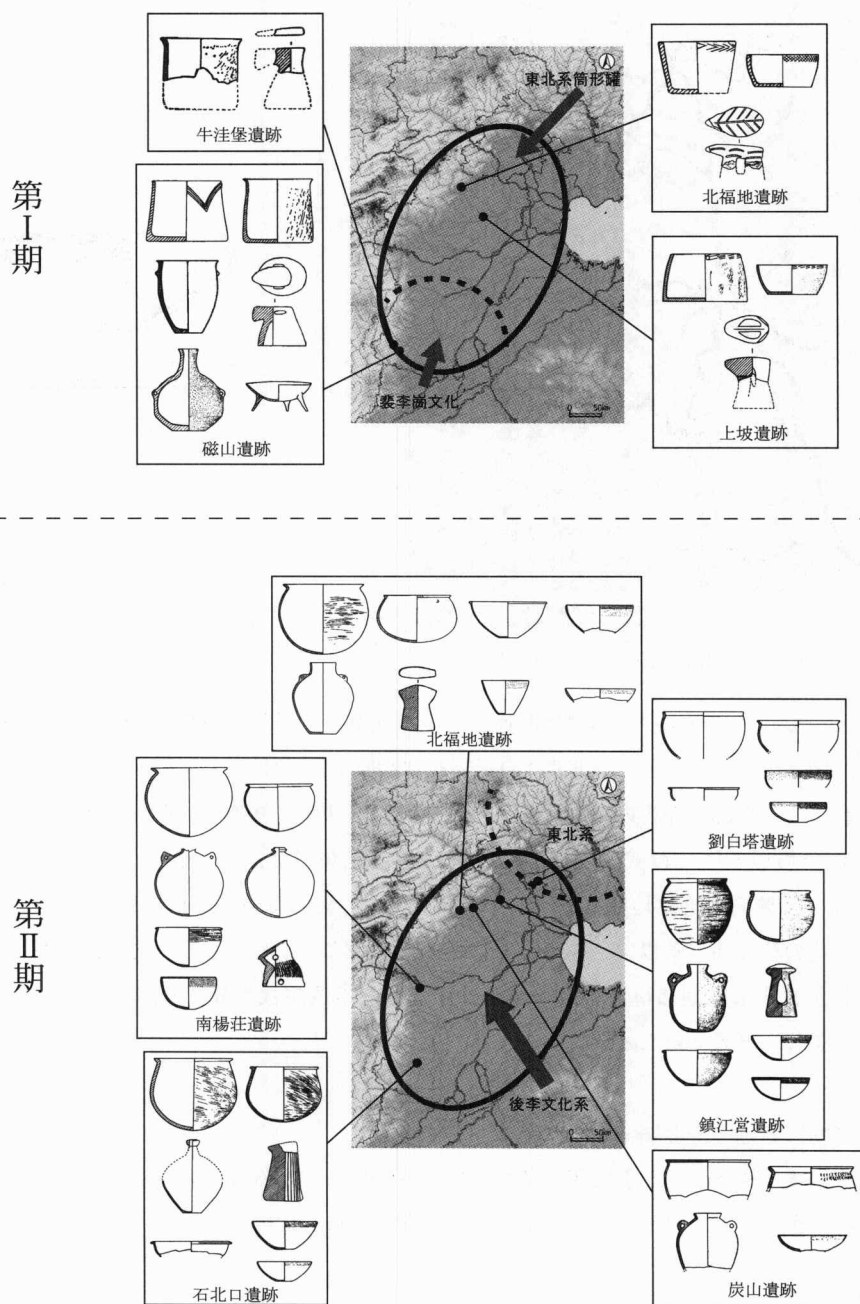


図8-1 時期別土器分布（第Ⅰ-Ⅱ期）

定されるが、支脚を使用する点で異なる。一方、南部では孟、支脚に加えて三足をもつ鉢ⅠAや深腹罐Ⅰ・Ⅱ、壺Ⅰなどバラエティに富む形式がみられる。すでに指摘されるところだが、これは河南を中心とする裴李崗文化の影響を受容したことによると考えられる（段ほか 2006）。ただ、筆者が磁山遺跡の土器を実見したところ、壺などは裴李崗文化のものよりも作りが粗く、全く異なることが分かる。大別形式レベルでは共通性があるが、細別形式レベルでは分けて考えるべきであろう。また、中部と南部の孟自体にも文様や器形に若干の違いがみられ、地域性があることが分かる。北福地遺跡の報告書では、この二つの地域性を北福地一期文化と磁山文化というように分けている（河北省文物研究所 2007）。

以上より、第Ⅰ期は中部と南部で孟や支脚というセット関係に共通性が認められるが、南部は裴李崗文化の影響からより多様な形式がみられることが分かる。それをもとに、南北に土器様式分布圏の違いを認めることができよう。

ii) 第Ⅱ期

第Ⅱ期になると遺跡数が増加し、報告されているだけで14遺跡に及ぶ。遺跡の分布は河北省と北京市全域に広がる。基本的な土器様式は釜Ⅰ・Ⅱ、支脚、壺Ⅱ・Ⅲ、盆Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ、鉢Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ・Ⅵ・Ⅶなどからなる。支脚が遺跡ごとに異なる形態を呈するが、その他の形式については対象地域全域ではほぼ同様の形態を呈する。第Ⅰ期と比較して大きく土器様式が変容するが、特に煮沸器としての釜は外来の影響のもとで出現したと考えられる。同時期以前の周辺を見渡すと、河南の裴李崗文化は主に深腹罐を煮沸器とする一方で、山東の後李文化は胴部が深い釜を主とする。したがって、第Ⅱ期の釜は時間的には鼎を多く出土する北辛文化に併行するが、後李文化の影響のもとで出現した可能性が高い。

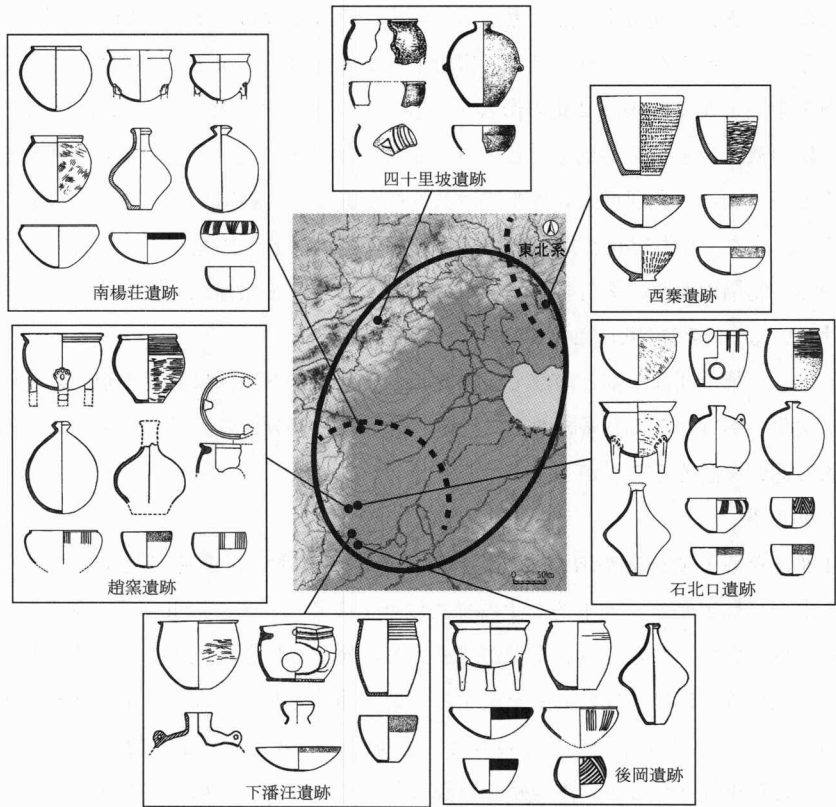
一方、河北東部の劉白塔遺跡でみられる土器様式は、他遺跡と若干異なる。他遺跡と同様に釜や紅帯を有する鉢を出土するが壺類がみられないほか、器表面に刻線文を施した盆や鉢を出土する。河北省中部から北京市周辺は第Ⅰ期において北福地遺跡で「之」字文が出土するように東北系の影響が強いが、これらの地域は元々鉢や壺を出土しない。鉢や壺は本来、河北南部や河南の裴李崗文化で多く出土する器種である。したがって、本論の対象地域でみられる鉢や壺をそれらの地域からの影響と考えると、鉢や壺が東北系の土器様式分布圏で受容される過程で壺が欠落し、鉢だけが採用されたと考えるべきであろう。

以上を整理すると、第Ⅱ期は次第に河南や山東の影響を受容し、対象地域全体ではほぼ同様な土器様式を有するに至る。したがって、第Ⅰ期と比較すると、一定の交流関係を想定できる均質な様式分布圏が形成されたと解釈できる。東北系の影響は第Ⅰ期よりも減少するが、より東北地方に近い地域の一部の遺跡では、鉢を中心とした河南や山東の影響を選択的に受容したため、異なる土器様式を形成したと考えられる。

iii) 第Ⅲ期

第Ⅲ期の土器様式は、既述したように第Ⅱ期の土器様式が内的変化を経て成立する。その分布

第Ⅲ期



第Ⅳ期

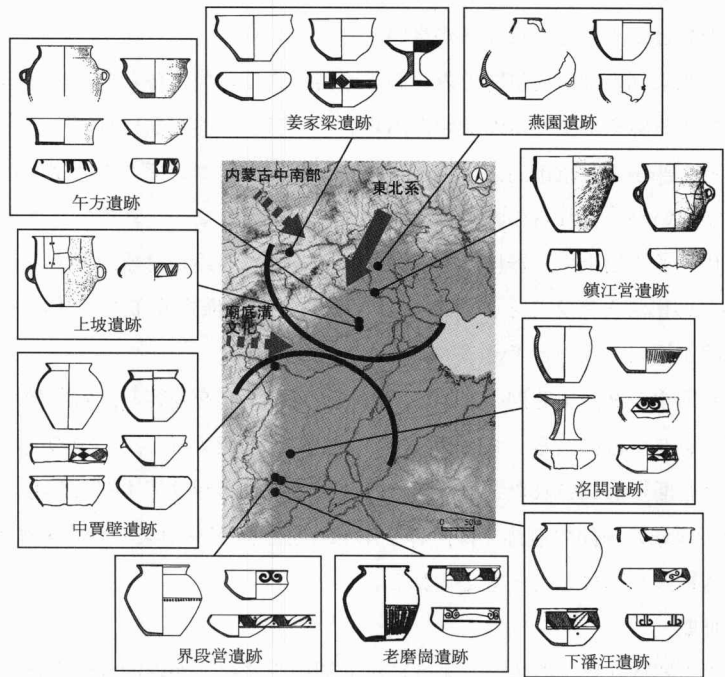


図8-2 時期別土器分布（第Ⅲ-Ⅳ期）

も第Ⅱ期と大きな違いはない。中心となる細別形式も煮沸器の鼎Ⅰ・Ⅱ及び鼓腹罐が釜と支脚に替わって出現するほかは、大別形式レベルの変化はみられない。そして、ここでも河北東部の西寨遺跡で対象地域の標準的な土器様式から外れる組み合わせが確認できる。西寨遺跡では煮沸器として東北系の「之」字文を施す筒形罐を出土し、さらに鉢や碗なども東北系のものが出土する。その中で紅帯をもつ本論のⅢBやⅣBに相当する鉢が出土する。西寨遺跡は地域的にも第Ⅱ期の劉白塔遺跡と遠くないため、このような河北東部の渤海湾北側地域で東北系の要素が強い状況は、第Ⅱ期から土器の様式分布圏が大きく変化していないことを示しており、当該地区が東北系の土器群との過渡地帯であったことを示唆する。また、西寨遺跡の第2期は本論の第Ⅲ期に相当するが、西寨遺跡第1期は土器様式について完全に東北地方と同様である。つまり、西寨遺跡第1期から第2期にかけて紅帯をもつ鉢などを受容したことになり、次第に東北地方の土器様式圏に南部の土器が浸透したことが分かる。一方、第Ⅱ期の劉白塔遺跡では煮沸器として東北系ではない釜が出土したが、第Ⅲ期の西寨遺跡では煮沸器も東北系の筒形罐となっている。これは、濰河流域に位置する西寨遺跡が劉白塔遺跡よりも東側に位置するためだと考えられる。このような状況も、当該地区が両土器様式分布圏の過渡地帯であることをよく示している。

このように、第Ⅲ期は第Ⅱ期から土器様式の内容も非常にスムーズに変化しており、様式分布圏の広がりもほぼ同範囲であった。したがって、第Ⅱ期から第Ⅲ期への変化は、外部からの強い影響も認められず、極めて安定的であったと考えられる。ただし、中部と南部の間に灶や壺など若干の違いがみられ、地域性を抽出できる可能性はある。また、「之」字文の筒形罐などを特徴とする東北系土器様式分布圏との境界が、対象地域東部の渤海湾北側にあったことが分かる。

iv) 第Ⅳ期

第Ⅳ期の遺跡も、ほぼ対象地域全域に分布する。土器様式をみると、第Ⅲ期までのように共通する主要形式を多く抽出することができず、滹沱河を境として河北南部と中部に明確に二分できるようになる。南部は鼓腹罐ⅣあるいはⅦ、盆Ⅳ・Ⅷ、鉢ⅢB・ⅣB・Ⅷなどを主とし、中部は煮沸器として深腹罐Ⅳ、供膳器として盆Ⅶ・Ⅺ、鉢ⅣB・ⅤBなどが中心となる。土器様式だけでなく、彩文などにも明確な違いがみられ、南部では弧線三角文や蝶鬚文が主要であるが、中部ではそれらがほとんどみられない。かつて韓建業が河北省中部から燕山北側までを雪山一期文化として認識したことがあるが（韓 2003b）、確かに中部の土器様式や彩文は燕山北側の土器様式と類似点が多く、その影響下で成立したと考えられる。東北系の筒形罐を主な煮沸器とすることも、そのような見方を後押しする。また、これは内蒙古中南部とも類似点を看取できるため、東北と河北北・中部、内蒙古中南部の間に一定の交流が生まれたといえよう。

一方、南部も第Ⅲ期と比較して、供膳器には共通性が看取できるが、煮沸器は鼓腹罐のみとなり大きな変化がみられる。鼓腹罐は第Ⅲ期にも存在するためその系統の中で理解することができるが、鼎の消失や彩文の出現などは極めて大きな土器様式の転換である。すでに述べたように、第Ⅳ期前葉には釣魚台類型の諸遺跡が併存すると考えられる。釣魚台類型の起源である廟底溝文

第Ⅴ期

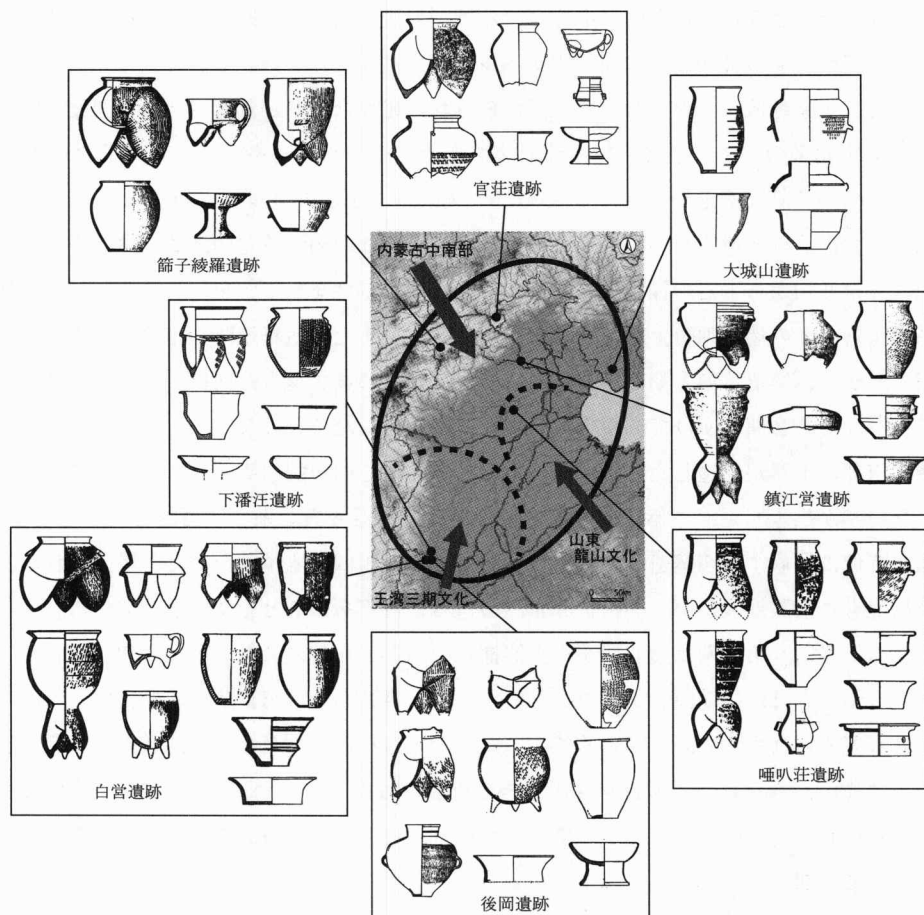


図8-3 時期別土器分布（第Ⅴ期）

化は鼓腹罐を煮沸器とし、多くの彩文をもつ盆や鉢がみられる。本論の対象地域以外でも廟底溝文化の影響を受けた河南省中・東部、内蒙古自治区中南部、陝西省西部や甘肅省東部、湖北省などでは、その後に独自の彩文を生み出す現象が確認できる。このように考えると、第Ⅲ期から第Ⅳ期にかけて廟底溝文化の影響をある程度受容した結果、第Ⅳ期のような土器様式が形成されたのではなかろうか。ただし、そのルートについては太行山脈を直接越えるルートだけではなく、河南の秦王寨類型を通した太行山脈南側ルートも考慮すべきであろう。

第Ⅳ期には、第Ⅲ期よりも強烈な東北地方の影響が存在し、土器様式分布圏も南部と中部に別の状況が形成された。盆や鉢には一定の共通性がみられるものの、これら2つの様式分布圏はやはり分けて考えるべきである。

v) 第Ⅴ期

第Ⅴ期は滹沱河流域で遺跡が確認されないものの、ほぼ全域に遺跡が分布する。この時期の最

大の特徴は煮沸器としての空三足器の出現であり、第Ⅳ期で二分された土器様式分布圏を越えて出土するようになる。ただ、空三足器にも系統の違いがあり、それぞれ起源を異にする。つまり、釜形の罍Ⅰや罐形の罍Ⅱは黄河流域で成立し、各形式の鬲や罍Ⅲ、甗Ⅱなどは別稿で指摘する予定だが、北方、特に内蒙古中南部にその起源を辿ることができる。また、煮沸器として鼓腹罐も出土するが、これもⅦ・Ⅷ・Ⅸのように他地域でみられず在地に系統が辿れるものと、Ⅹのように河南の王湾三期文化で多くみられる系統に分かれる。ただ、これら各系統の形式は南部と中部で排他的に出土するわけではなく共存する。相対的にみれば、特に北方に起源する空三足器の出土が南部と中部ともに多くみられ、その結果として対象地域全体の共通性を第Ⅳ期よりも高めている。逆に河南の王湾三期文化の影響のもとで出土する形式は南部に多くみられるため、結果的に南部と中部で若干の土器様式の違いを生み出している。

煮沸器以外の形式については、盆Ⅹ・ⅩⅣ、豆Ⅲ、碗Ⅶなど対象地域全域で出土する形式がみられる。この点からも、第Ⅴ期における南部と中部の差異がそれほど大きくないことが分かる。また、特筆すべき点として、特に唾叭莊遺跡で山東龍山文化の強い影響が看取できる点を挙げる。その他、鎮江營遺跡でも若干の影響が認められる。これはすでに王青により指摘されているが（王青 1995）、距離的にはあまり違わない河北南部よりも中部に山東の影響が強い点は、黄河旧河道などを含めた自然地理的な視点から理解する必要がある。実際に、新石器時代における黄河旧河道が唾叭莊遺跡よりも東に位置したと考えられていることを考慮すれば（譚 1981など）、黄河旧河道が山東の影響を区切る一つの障壁となっていた可能性が高い。

（2）地域間関係の変遷

各時期における土器の分布状況を通して、太行山脈東側の新石器時代は次第に交流関係を複雑化させつつ、少しずつ異なる影響関係のもとで土器様式を形成したことが分かる。第Ⅰ期では東北の筒形罐との共通性が考えられる盂を中心に、南部から裴李崗文化の影響を受容して、太行山脈東側の南部と中部にやや異なる様式分布圏が成立する。第Ⅱ期になると、河南や山東の影響力が増すとともに、東北系の要素が渤海湾北側まで退き、全域でかなり統一性の高い様式分布圏が形成される。第Ⅲ期についても第Ⅱ期を安定的に踏襲し、渤海湾北側の灤河流域以外では共通する土器様式がみられる。しかし第Ⅳ期になると、東北系の影響力が再び増大し、滹沱河付近を境として南北に二分される。この変化は、内蒙古中南部が東北の小河沿文化の影響のもとでいわゆる海生不浪文化を成立させた現象と連動し、河北中部もその北方における東西交流に一部組み込まれた可能性を想定できる。また、太行山脈を越えるルートなどを通して西から入り込んだ廟底溝文化の影響のもと、彩文を中心に土器様式が変化する。第Ⅴ期には、さらに北方から、特に内蒙古中南部からの影響が強まり、空三足器を中心とした土器群が全域で出土するようになる。一方で、南からは河南の王湾三期文化、東からは山東の龍山文化の影響がみられ、結果的に南部と中部で異なる土器様式を構成するようになる。

このように、太行山脈東側は周辺地域の影響のもとで、各時期の土器様式をつくり上げてきた。特に東北と内蒙古中南部を含む北方系、河南、山東の影響力のバランス関係が土器様式の主要な決定要因となっている。一方、南北に走る太行山脈により、西側からの直接的な影響は極めて限定的であり、廟底溝文化の影響がみられるだけである。

太行山脈東側にみられる地域間関係には二つのパターンが抽出できる。一つは大きく滹沱河を境として南部と中部に分かれるパターン、二つは渤海湾北側を除いて全域の共通性が高いパターンである。一つ目の場合は、煮沸器にも差異がみられる第Ⅳ期が最も顕著であり、第Ⅰ期や第Ⅴ期では差異の他に共通性もある程度は認識することができた。一方、二つ目は第Ⅱ期と第Ⅲ期に相当し、全域で共通性の高い土器様式がみられた。これらの両パターンはそれぞれ地域間交流の強弱による土器様式の変化から抽出できるが、交流の強弱を決定した要因については自然地理的な側面や古気候の変化、土器自体の機能的特徴などを踏まえたうえで、さらに考察を進める必要があろう。

6. 結論

河北省や北京市、河南省北部を含む太行山脈東側は、華北平原と呼ばれる平原地帯が大半を占め、地域間交流も活発に行われたと想定できる。本論でも、その想定通りに南北からの複雑な影響のもとで当該地区の各時期における土器様式が決定されたことを明らかにした。遺跡分布をみると、大部分の遺跡が現在の滏陽河、子牙河よりも西に位置しており、黄河の旧河道が現在よりも北側にあったことを考慮すれば、太行山脈と旧黄河に挟まれた南北に長い地域に遺跡が集中していることが分かる。もちろん、後世における河川の氾濫の影響により遺跡が埋没した可能性も排除できないが、いずれにせよ、このように東西の交流が制約された環境であったからこそ、主な交流対象地域が南北となったのである。

視点を転じると、やはり太行山脈は東西交流の障壁であった。しかし、廟底溝文化にはじまり、第Ⅴ期には太行山脈西側と煮沸器としての構造を共有する同系統の空三足器が出現する。これは既述した太行山脈を東西に抜けるルートを紹介した交流であったといえよう。ただ、空三足器の細部には太行山脈の東西で差異がみられ、直接的かつ活発な交流関係にあったとは考えられない。この太行山脈東西における空三足器をはじめとした共通要素について、筆者は内蒙古中南部という共通する起源をもつためだと考える。内蒙古中南部で鬲などの空三足器が出現し、それが太行山脈を分水嶺のようにして南下する。しかし、東西間の交流はある程度の制約があるため、結果的に大別形式としては共通するが、細別形式としては異なる空三足器が東西で出現したと考えられる⁽³⁾。ただし、相対的にみれば第Ⅴ期における東西の交流関係は、それ以前の時期と比較して確実に密接になり、太行山脈を挟んだ地域間にも交流ルートが確実に形成され始めたことが窺える。このような太行山脈を挟む交流の活発化の流れの中で、二里头文化併行期には山西に起

源する鬲が太行山脈東側へ伝播し、いわゆる先商文化の主体的要素となっていくとされる。

一方、太行山脈東側は北方や河南、あるいは山東などの地域の影響を受容してはいたが、ほとんどその独自性を失うことはなかった。例えば内蒙古中南部の石虎山遺跡や王墓山坡下遺跡などでは、土器組成や住居址について外来の影響をほぼそのまま受容している。しかし、太行山脈東側ではそれぞれ周辺地域に起源する土器が認められるものの、それらの地域とは土器様式や型式において一線を画している。これは、当該地区の居住者が外来の文化要素を受容し、それを改変しながら自らの中に取り込んだ結果に他ならない。

しかし、一定の独自性を保ちながらも、第Ⅱ期に内蒙古中南部のみに当該地域の影響が看取できる以外は、太行山脈東側の文化要素が周辺地域全体へ強い影響を与えた痕跡は見当たらない。これは、内蒙古中南部のように他地域の文化要素を受容し、それを取り込んで在地化しつつ、他地域の影響を受容しなくなった段階でさらに独自性の強い文化内容をつくり上げたのとは異なる。あくまでも当該地域が隣接するある地域の影響を受容し在地化した後に、さらに続けて他の地域の影響を受容するという、常に周辺地域の影響を受け続けてきた事実が関係しよう。また、外来の影響を在地化しながらも、新たな土器形式を多く創出しなかったことも対外的な影響力を持たなかった理由の一つである。内蒙古中南部では鬲という新たな形式を創出し、それが広域に伝播する現象が起きる。しかし、太行山脈東側ではそのような現象はみられず、一貫して受身の地域であり続けた。このような周辺地域の文化を柔軟に受け入れ、それらの要素を根本的に改変せずに在地化していく当該地区の性質は、まさに段宏振がいう「太行山脈東麓走廊」という言葉に相応しいといえよう。

おわりに

本論の目的は、太行山脈東側の土器編年を再考し、さらにそれをもとにして各時期間の継承関係や地域間の交流関係を整理する点にあった。したがって、大きな流れを重視するために詳細な検討を省略せざるを得ない部分もあった。また、地域間関係を決定する主要因子である自然地理的環境などにも具体的に言及することができなかった。これらについては別稿に委ねるとして、少なくとも本論では太行山脈東側の新石器時代における変遷や交流関係について一定の見解を示すことができたかと思う。太行山脈北側の内蒙古中南部、西側の山西については改めて別稿で論じ、最終的に環太行山脈地区における交流の全容を提示していきたい。

謝辞

本論を執筆するにあたり、2013年度に早稲田大学を退官された岡内三眞先生には多くの示唆に富むアドバイスをいただいた。また、中国社会科学院考古研究所の王巍、叢徳新、朱岩石、河北省文物研究所の段宏振、高建強、郭濟橋をはじめとする諸先生方には資料調査に際し便宜を

図っていただき、丁寧な対応をしていただいた。心より、感謝申し上げます。

註

- (1) 華北地区の新石器時代前期については、北京市の軒年遺跡や東胡林遺跡、河北省の南莊頭遺跡などで土器片が出土している。しかし、遺跡数も少なく、いずれも断片的な資料であるため、いまだに地域間交流の実態を論じるに至らない。
- (2) 筆者が河北省文物研究所で資料調査をさせていただいた際に、研究員の高建強氏よりご教示いただいた。磁山遺跡の報告からでは認識することが難しいが、未報告の資料を合わせた支脚は出土数が非常に多く、形態変化も極めて明確であった。
- (3) ただし、山西西南部で出土する空三足器には陝西の客省莊二期文化に起源する髙の影響も考慮する必要がある。

引用文献

- 于孝東 2006 「鎮江營遺址一、二期遺存的分期及相關問題的討論」『辺境考古研究』第5輯
- 王青 1995 「試論任邱唾叭莊遺址の龍山文化遺存」『中原文物』第4期
- 河北省文物管理处 1984 「河北遷安新安莊新石器遺址調査和試掘」『考古学集刊』4
- 河北省文物管理处、邯鄲市文物保管所 1981 「河北武安磁山遺址」『考古学報』第3期
- 河北省文物研究所 2003 『正定南楊莊』科学出版社
- 河北省文物研究所、唐山市文物管理处、遷西県文物管理处 1992 「遷西西寨遺址1988年発掘報告」『文物春秋』増刊
- 韓建業 2003 「論雪山一期文化」『華夏考古』第4期
- 喬登雲 2001 「豫北冀中南地区新石器時代考古回顧与展望」『文物春秋』第5期
- 久保田慎二 2008 「陶寺文化の成立とその背景—土器分析を中心に—」『中国考古学』第8号
- 呉東風 1996 「大司空文化陶器分期研究」『環渤海考古国際學術討論会論文集』知識出版社
- 後藤健 2009 「文化財分野におけるGIS活用事例—石窟寺院基礎データの管理と分析についてのシュミレーション研究」『太行山脈一帯に点在する仏教石窟群の包括的保護計画策定に関する日中共同研究』平成17年度—20年度科学研究費補助金（基盤研究(B)）研究成果報告書
- 国家文物局、山西省考古研究所、吉林大学考古学系 1999 『晋中考古』文物出版社
- 山西省歴史地図集編纂委員会 2000 『山西省歴史地図集』中国地図出版社
- 譚其驥 1981 「西漢以前の黄河下游河道」『歴史地理』創刊号
- 段宏振 1991 「試論廟底溝類型彩陶の伝播」『文物春秋』第1期
- 1992 「太行山東麓地区新石器時代早期文化的新認識」『文物春秋』第3期
- 1998 「試論華北平原龍山時代文化」『河北省考古文集』1
- 2001a 「河北考古の世紀回顧与思考」『考古』第2期
- 2001b 「太行山東麓走廊地区の史前文化」『河北省考古文集』2
- 段宏振、張渭蓮 2006 「北福地与磁山—公元前6000～前5000年黄河下流地区史前文化的格局」『文物』第8期
- 張之恒 1989 「磁山裴李崗文化与黄河流域同時代諸文化的關係」『磁山文化論集』河北人民出版社
- 張忠培・喬梁 1992 「後岡一期文化研究」『考古学報』第3期
- 陳冰白 1993 「略論“大司空類型”」『青果集』知識出版社

- 鄭紹宗 1992 「河北考古發現與展望」『文物春秋』增刊
梅鵬雲 2002 「磁山文化再觀察」『文物春秋』第4期
文物出版社編 1999 『新中国考古五十年』文物出版社
北京市文物研究所 1999 『鎮江營與塔照』中国大百科全书出版社
《中国国家地理地圖》編委会 2010 『中国国家地理地圖』中国大百科全书出版社

《報告書》

- 安陽地区文物管理委員会 1980 「河南湯陰白堊龍山文化遺址」『考古』第3期
保定地区文物管理所，安新縣文化局，河北大學歷史系 1990 「河北安新縣梁莊，留村新石器時代遺址試掘簡報」『考古』第6期
保定地区文物管理所，徐水縣文物管理所，北京大學考古系，河北大學歷史系 1992 「河北徐水縣南莊頭遺址試掘簡報」『考古』第11期
北京大學，河北省文化局，邯鄲考古發掘隊 1959 「1957年邯鄲發掘簡報」『考古』第10期
北京大學考古實習隊 1990 「河北唐山地区史前遺址調查」『考古』第8期
北京市文物研究所 1989 「北京市拒馬河流域考古調查」『考古』第3期
1999 『鎮江營與塔照』中国大百科全书出版社
北京市文物研究所，北京市平谷文物管理所 1989 「北京平谷上宅新石器時代遺址發掘簡報」『文物』第8期
1989 「北京平谷北坨頭新石器時代遺址的調查與發掘」『文物』第8期
趙印堂，楊劍豪 1955 「曲陽縣附近新發現的古文化遺址」『考古通訊』創刊号
承德縣文物保護管理所 1992 「河北省承德縣新石器時代遺址調查」『考古』第6期
董增凱，孟昭林 1955 「河北省曲陽縣發現彩陶遺址」『文物參考資料』第1期
邯鄲市文物保管所，邯鄲地区磁山考古隊短訓班 1977 「河北磁山新石器遺址試掘」『考古』第6期
河北省文管處 1981 「正定南楊莊遺址試掘記」『中原文物』第1期
河北省文化局文物工作隊 1961 「河北邯鄲澗溝村古遺址發掘簡報」『考古』第4期
1962 「河北永年縣台口村遺址發掘簡報」『考古』第12期
河北省文物管理處 1974 「磁縣界段營發掘簡報」『考古』第6期
1975 「磁縣下潘汪遺址發掘報告」『考古學報』第1期
1983 「河北三河縣孟各莊遺址」『考古』第5期
1984 「河北遷安安新莊新石器遺址調查和試掘」『考古學集刊』第4集
河北省文物管理處，邯鄲地区文物保管所，邯鄲市文物保管所 1984 「河北武安名河流域幾處遺址的試掘」『考古』第1期
河北省文物管理處，邯鄲市文物保管所 1981 「河北武安磁山遺址」『考古學報』第3期
河北省文物管理委員會 1959 「河北唐山市大城山遺址發掘報告」『考古學報』第3期
河北省文物研究所 1987 「河北容城縣午方新石器時代遺址試掘」『考古學集刊』第5集
1990 「河北永年縣洛閔遺址試掘簡報」『文物春秋』第4期
1992 「河北省遷西縣東寨遺址發掘簡報」『文物春秋』增刊
1992 「涿河流域考古調查簡報」『文物春秋』第1期
1992 「靈壽縣文物普查簡報」『文物春秋』第1期
1998 「河北滄縣陳圩遺址發掘簡報」『河北省考古文集』1
1999 「河北容城縣上坡遺址發掘簡報」『考古』第7期

- 2001 「河北陽原県姜家梁新石器時代遺址の発掘」『考古』第2期
- 2003 『正定南楊莊』科学出版社
- 2007 『北福地』文物出版社
- 河北省文物研究所，保定地区文管所，涑水文保所 1992 「河北涑水北封村遺址試掘簡報」『考古』第10期
- 河北省文物研究所，保定市文物管理处，句邑県博物館 2006 「河北易県北福地新石器時代遺址発掘簡報」『文物』第9期
- 河北省文物研究所，滄州地区文物管理所 1992 「河北省任邱市啞叭遺址発掘報告」『文物春秋』増刊
- 河北省文物研究所，邯鄲地区文物管理所 1989 「河北永年石北口遺址発掘簡報」『文物春秋』第3期
- 1998 「永年県石北口遺址発掘報告」『河北省考古文集』1
- 河北省文物研究所，邯鄲市文物管理处，永年文物保管所 1998 「永年県榆林遺址発掘簡報」『河北省考古文集』1
- 河北省文物研究所，邯鄲市文物研究所，峰峰鉅区文物保管所 2001 「邯鄲市峰峰電廠義西遺址発掘報告」『文物春秋』第1期
- 河北省文物研究所，河北文化学院 1992 「武安趙窯遺址発掘報告」『考古学報』第3期
- 河北省文物研究所，任県文保所 1990 「任県臥龍岡遺址調査簡報」『文物春秋』第4期
- 河北省文物研究所，唐山市文物管理处，遷西県文物管理处 1992 「遷西西寨遺址1988年発掘報告」『文物春秋』増刊
- 河北省文物研究所，張家口市文管处，懷来博物館 2001 「河北省懷来県官莊遺址発掘報告」『河北省考古文集』2
- 河南省安陽地区文物管理委员会 1983 「湯陰白営河南龍山文化村落遺址発掘報告」『考古学集刊』第3集
- 滹沱河考古隊 1993 「河北滹沱河流域考古調査與試掘」『考古』第4期
- 懷安県文保所 1993 「河北省懷安県新石器時代遺址調査簡報」『文物春秋』第3期
- 1997 「宋家房遺址調査簡報」『文物春秋』第2期
- 拒馬河考古隊 1988 「河北易県涑水古遺址試掘報告」『考古学報』第4期
- 廊坊市文物管理处 2004 「河北三河県劉白塔新石器時代遺址第二次発掘」『文物春秋』第2期
- 廊坊市文物管理所，三河県文物管理所 1995 「河北三河県劉白塔新石器時代遺址試掘」『考古』第8期
- 李珣，翟良富 2004 「1990年遷西県史前遺址調査」『文物春秋』第4期
- 羅平 1965 「河北邯鄲百家村新石器時代遺址」『考古』第4期
- 唐雲明 1964 「河北邢台柴莊遺址調査」『考古』第6期
- 王武鈺 1989 「雪山遺址第二次考古調査與発掘收穫簡述」『北京考古信息』2
- 岳昇陽 2002 「燕園遺址調査簡報」『考古與文物』増刊
- 張家口地区博物館 1988 「河北陽県桑干河南岸考古調査簡報」『北方文物』第2期
- 張家口考古隊 1981 「一九八七年蔚県新石器時代考古的主要收穫」『考古』第2期
- 1982 「蔚県考古紀略」『考古與文物』第4期
- 中国科学院考古研究所安陽工作队 1965 「安陽洹河流域幾個遺址の試掘」『考古』第7期
- 1972 「1972年春安陽後岡発掘簡報」『考古』第5期
- 1972 「1971年安陽後岡発掘簡報」『考古』第3期
- 1982 「安陽後岡新石器時代遺址の発掘」『考古』第6期